



遵義会議の政治思想史

緒形, 康

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 51:21-103

(Issue Date)

2024

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100487329>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100487329>



遵義會議の政治思想史

緒 形 康

一 遵義會議の決議は『六大以来』に発表された

一九三四年一〇月一〇日から三五年九月二二日に至る「長征」を通じて、中共中央の権力構造は激変した。博古（秦邦憲）、周恩来、オットー・ブラウンからなる軍事最高指導機関「三人団」は、毛沢東、周恩来、王稼祥、彭徳懷、林彪の「五人団」に再編された。だが、そうした変化とは不釣り合いなほど、この時期に開かれた諸會議の決議のうち公開されたものは数えるばかりである。

「三人団」が解消されたのは、一九三五年一月一五日から一七日にかけて召集された中央政治局拡大会議においてである。この會議は遵義會議の名でも知られ、「事實上、毛沢東同志の党中央と紅軍における指導的地位を確立した¹」と言われる。「事実上」という但し書きが示すように、毛沢東の指導的地位は、同會議で完全に確立されたわけ

ではない。八か月が経った九月一日深夜、洛甫（張聞天）を総書記とする中共中央の属する右路軍が、朱德総司令、張国燾政治委員、劉伯承総參謀長が率いる左路軍の指令に反し、北へと逃亡する事件が起こる。一〇月五日、張国燾が卓木碉で中央委員会を組織するに及んで、中共中央は二つに分裂した。この分裂が解消するのは、「長征」後の三六年六月六日である。

一九四一年一二月、毛沢東は『六大以来』という党内機密文献集を編集発行した。三五年一月に挙行された遵義會議の決議は、「中央の敵の第五回『包囲討伐』に反対することに関する総括決議」（遵義會議、一九三五年一月八日政治局會議通過）という題名で、初めて公開された。

歴史問題をコミンテルンの解釈に囚われずに論ずる参考資料として準備されたのが『六大以来』だった。中共第六回全國代表大會（一九二八年六月開催）から四一年一月までの党内機密文献を五一九編、合計で二八〇万字集めている。政治秘書の胡喬木、政治保衛局局長の王首道を編集助手に加え、中共には「二つの路線」の闘争が存在したと述べ、毛沢東を正しい路線の体現者、コミンテルンの影響を受けたソ連留學生グループを右傾と「左」傾の誤った路線の体現者として描いた。

毛沢東は細心の注意を払って、文書を選択し、自己の路線の正しさを際立たせるために、原文の発表日時を変え、文章に加筆修正を施すこととさえした。『赤い太陽はどう昇ったか…延安整風の由来』の著者、高華はこう述べている。

『六大以来』を編集する中で、毛沢東は自分の政治目的に叶うように、個々の文件の日付に細工を加えた。それには確かな証拠がある。任弼時が司会し通過させた「中央ソヴェト区第一回党代表大会政治決議案」は、その初出の文

章が一九三一年一月一日から五日に書かれたのに、『六大以来』に収録された際、一九三一年三月と改められた。この改正は尋常ではない。そうすることで、一九三一年四月から一〇月にかけて、任弼時を団長とする中央代表团が毛沢東を支持し、毛と連携して共に項英に反対したという歴史の真実が覆い隠されることになった。毛はなぜこの決議案を選んだのか。この文章は、毛の主張した「多いところから取って少ないところを補う」とか「肥えた田から取って痩せた田を補う」といった土地政策を批判しており、逆の側面から、六期四中全会後の中央と毛の間に、深刻な路線対立があったことを説明しているからである。一九三二年三月、四中全会後の中央が江西に派遣した代表团は、現地に着くや、毛の正しい主張に反対したため、毛は長期にわたって中央の不当な抑圧を被ることになった。そうした事実を強調するため、毛は、この決議案を『六大以来』に収録し、任弼時にこう警告を与えようとしたのだ。おまえは、歴史的に見て、誤った路線に手を染めたことがあるのを分かっているのだろうか、と。³

高華の発言が正しいなら、毛沢東は自分の正しさを証明するために、遵義会議の決議原稿にも少なからぬ修正や加筆を行った可能性がある。党の軍事の政策決定への参与を拒まれてきた毛沢東は、「長征」が終わったときには、最高軍事指導者へと躍進を遂げている。この権力の急激な上昇を正当化するために、修正や加筆の作業はとくに念入りになされただろう。事実、我々はすでに、この決議が『六大以来』に記した「一月八日」には開催されなかったことを知っているのである。

二 遵義會議の参加者、議事進行

一九三五年一月九日に遵義に入城した中央革命軍事委員会（以下、中革军委と略称）の幹部たちは、遵義城の元支配者、国民党第二五軍第二師師長、柏輝章の公館に紅軍司令部を置いた。場所は、遵義城枇杷橋場柳街子尹路八〇号。一月一五日午後七時、この柏輝章公館の二階に、夕食を済ませた幹部たちが集まり、中央政治局拡大会議（遵義會議）が始まった。参加者は次の一九人である。

中央書記処書記・博古（秦邦憲）〔総書記〕、洛甫（張聞天）、周恩来、陳雲⁴

中央政治局委員・王稼祥、毛沢東、朱德⁵

中央政治局候補委員・劉少奇、鄧発、凱豊（何克全）⁶

中華ソヴェト政府中革军委参謀長・劉伯承

紅一方面軍總政治部代理主任・李富春

紅一軍団・林彪（軍団長）、聶荣臻（政治委員）

紅三軍団・彭德懷（軍団長）、楊尚昆（政治委員）

紅五軍団・李卓然（軍団長）

コミンテルン軍事顧問・オットー・ブラウン（Otto Braun、中国名、李德。華夫とも）

通訳・伍修権⁷

会議の議題は、(1)黎平會議（一九三四年二月一八日開催）で批准された「貴州北部を中心に、ソヴェト根拠地を創設する」方針の再検討、(2)第五回「包圍討伐」への反対と西征途上の軍事指揮をめぐる経験や教訓の検討、であった。

初日一五日午後七時、博古が開会を宣言した後、議題(1)につき意見交換がなされた。黎平會議の進軍方針を軌道修正する必要があるという問題提起を行ったのは劉伯承と聶榮臻である。二人は、貴州北部に根拠地を作るのではなく、「長江へと打って出て、四川の西北部の根拠地を築く」ことを考慮してはどうかと提案した。四川の北西部後方にある西康省には国民党軍がまだ進駐していない。その四川に出れば、紅四方面軍が樹立した四川・陝西根拠地と連携できるし、経済事情も貴州よりは優っているというのが、その理由だった。会議は二人の提案を了承した。

会議の討論は議題(2)に移った。まず、博古が中央を代表して、第五回「包圍討伐」に反対する鬭争の総括報告を行った。蔣介石による第五回「包圍討伐」を打破できなかったのは、帝國主義と国民党の圧倒的な力量に、中央と紅軍が十分に対応できなかったからである。軍事指導が誤ったから紅軍は敗北したのではない。六期四中全会以来の政治上の戦略部署は依然として正しかったと述べた。

しかし、博古を受けて周恩来が行った軍事に関する副報告は、博古とはかなりニュアンスを異にするものだった。「包圍討伐」への対処の失敗と中央ソヴェト区からの逃走に、客観的な理由があるのは事実である。だからと言って、軍事指導の面で、中央が犯した大きな戦略上の誤りから目を逸らすことはできない。「三人団」の軍団長として、一連の軍事作戦によって紅軍戦力が被った深刻な損傷（西征時の八万人は湘江戦役後、三万人に激減した）について、率直に自己批判をしたい。周の副報告は四〇〇五〇分の長大なものであった。¹¹

博古、周恩來の正・副報告の後、会場は緊迫した空気に包まれた。まず洛甫が、博古報告には同意できないと口火を切った。彼はポケットから、すでに準備していた発言レジュメを取り出すと、激しい勢いで、中央が軍事路線上で犯した「左傾日和見主義」の罪状を列挙し、こうした誤りの責任を中央は負わねばならないと主張した。良く知られるように、毛沢東、洛甫、王稼祥の三人は、遵義での政治局會議の開催が決まったところから、博古とブラウンの軍事指導の責任を追及する準備を入念に進めていた。洛甫（張聞天）が参照した演説草稿は、彼ら「トロイカ」¹²が共同執筆したもので、「毛張王レジュメ」と呼ばれる。一九三四年二月一八日の黎平會議終了後から書き始め、三五年一月八日に定稿を見た。¹³毛沢東の遊撃戦争の理論を軸に、中央の戦略が決戦防衛を放棄し、消極防衛に固執した誤りを系統的に分析したものだ。

洛甫に次いで、毛沢東が中央の軍事指導を攻撃した。博古とブラウンの消極防衛は、三つの段階をたどって、「左傾日和見主義」へと転落していった。まず、進攻の中で冒險主義の過ちを犯し、第二に、防衛の中で保守主義へと矮小化され、第三に、退却する際、逃亡主義に陥った。「敵を国門の外に防げ」、「寸土たりとも土地を失うな」、「六路に兵を分けよ」といったスローガンが、この三つの段階を象徴する。毛沢東の舌鋒鋭い批判は一時間三〇分に及んだ。同席した陳雲は、このときの毛沢東の発言に対する印象を、後年（一九七七年八月二三日）、こう語っている。「毛主席の會議での発言は理路整然としたもので、その内容は『中国革命戦争における戦略問題』という文章で語られることになるものだった。¹⁴」

毛沢東の発言が終わると、林彪が立ち上がった。彼は毛の意見に完全に同意すると前置きしたうえで、中革軍委の戦略面での誤りを、具体的な戦役に即して説明した。中革軍委に導かれるまま、全ての作戦を遂行していれば、紅軍

の受けた被害はさらに甚大なものになっただろうと林彪は言った。八月末から九月初めの温坊戦役を遂行する中で、自身が中革軍委の作戦を実行に移すことなく、敵を深く誘い入れ、運動戦の中で敵を殲滅する作戦を実行して数少ない勝利を得たことを強調した。温坊戦役の勝利を見る限り、毛沢東の述べた戦略や戦術の正しさは明らかだ。¹⁵

「三人団」のコミンテルン軍事顧問、オットー・ブラウンは、会議の席を与えられず、前方ドアの入り口右手に立ったまま、伍修権の通訳によって会議の行方を追っていたが、ここで「三人団」の軍事指導を弁護する発言を行った。そのとき、紅軍総司令の朱徳が、拳でテーブルを激しく叩きつけて、こう言い放った。「そのような誤った指導が今後も続くなれば、我々はもはや一步も前に進むことはできない！」¹⁷

王稼祥も毛沢東を擁護した。「私は毛沢東の発言に同意する。彼が指摘したように、第五回『包囲討伐』に反対する戦争が失敗したわけは、我々が軍事戦略において嚴重な誤りを犯したからだ。それ以外の原因に帰することなど論外である。敗北の原因に客観的な要素が多少あったにしても、それは主要なものでは絶対でない。」¹⁸

陳雲と楊尚昆は、洛甫、毛沢東、王稼祥の発言に、短く賛意を表したのみだった。彭徳懷は黙して語らなかった。(BYM: 119) 毛沢東の発言は無原則な独り言ではないのか？ そんなヒソヒソ話が会議では飛び交っていた。というのも、「毛沢東自身が役者を割り当て、洛甫、王稼祥、そして言うまでもなく林彪が、飛び切り粗野な雰囲気醸し出していたからである。」(ACAC: 103) 大きな動揺の中で、初日の議事は終了した。

一月一六日午前、二日目の討論が始まった。最初に手を挙げたのは長く白区(国民党支配地域)工作を担当した劉少奇だった。この日、彼は、六期四中全会以来の、とりわけ五中全会からの、白区とソヴェト区に関する党の路線の是非を早急に検討せねばならないと訴えた。「白区における民族ブルジョアジーとの合作を拒絶し、小ブルジョア

ジーとの連合をも拒絶するのは『左』傾閥門主義だと思う。白区の地下党が、都市ストライキ、授業ボイコット、暴動の蜂起を積極的に奨励するだけで、ソヴェト区の戦争圧力を緩和できると考えるのも、『左』傾冒險主義であつて、これら全ては『左』傾本位主義の政治路線の表現にほかならない。」(BYM: 119)

劉少奇のこの非難に、博古は猛然と反論した。コミンテルンの援助のもと、羅章竜やトロツキスト派の分裂主義を克服してきた歴史を振り返り、党の白区政策を擁護したのである。興味深いのは、博古攻撃の援軍であるはずの劉少奇発言に対して、洛甫、毛沢東、王稼祥の「トロイカ」が固い沈黙を守ったことだ。彼らは、博古とブラウンは非難しても、彼らが後ろ盾とするコミンテルンの政策にまで批判の矢を向けることは得策ではないと考えていた。それでは、中共がコミンテルンの一支部であるという組織原則に抵触する。今は、政治路線の誤りを組上に載せるべきではない。闘争の矛先は軍事路線の誤りに限定すべきなのだ。

ところが凱豊は、劉少奇発言を手がかりに、毛沢東たちが禁忌とした政治路線問題にさらに深く切り込み、博古の擁護に回った。「劉少奇の述べる通り、中央の路線が『左』傾本位主義であるなら、これは我々の裁量を越える問題で、デIMITロフ同志の回答を待つしかない。しかし、デIMITロフ同志の返事を待つまでもなく、五中全会以来の中央の政策全てに、『左』傾のレッテルを貼るのは行き過ぎである。全ての誤りを博古とブラウン同志にだけ押し付けることには反対だ。そもそも、毛沢東はマルクス・レーニン主義の何を理解しているのだろうか。彼が学習したのは、せいぜい『孫子兵法』ぐらいではないのか。」(BYM: 120) 毛沢東がすかさず、凱豊に半畳を入れた。「そう言う君は、『孫子兵法』が何章立てかを知っているのかね?」¹⁹

博古はここで、午前の部を終わり、休憩を宣言した。紅三軍団の彭德懷と楊尚昆は、国軍の第二兵团第二路追剿縦

隊（司令官呉奇偉）が烏江を越えたという知らせを受け、急遽、前線に戻るようになった。²⁰

会議二日目の午後は、各軍団の幹部からの発言が相継いだ。劉伯承は、洵口戦役の勝利は偶然のものにすぎなかったのに、その勝利を過信して「敵を国門の外に防ぐ」戦略を続けたため、広昌戦役では、防御における保守主義へと後退することになったと、「三人団」の戦略を改めて批判した。

紅五軍団軍団長の李卓然は、前線から昨日（二五日）深夜、遵義に着いたばかりで、一六日午後より会議に参加した。彼が指揮する紅五軍団は、西へと大移動する紅軍最後尾の護衛を担当した。湘江戦役で甚大な被害に遭ったのが、この部隊にはかならない。三四師は全滅し、政治委員の程翠林、政治部主任の蔡中都在陣没、師長の多くも国軍の捕虜となった。李卓然が語る紅五軍団の悲劇は、会議参加者の心を大きく揺さぶった。²¹

紅一軍団軍団長の林彪は、初日に続いて、毛沢東に対する絶対支持を表明した。その根拠として、一九三四年四月二日に中革軍委に宛てた手紙の内容を、会議参加者に説明した。林彪はその中で、ブラウンの「短距離突撃」の考え方を、第五回「包囲討伐」に反対する戦争に適用してはならないと主張していた。²²ブラウンが七三年に証言したところでは、この手紙は、中央の論拠を撃破するために、毛沢東が林彪に前線から手紙を出すよう事前に命じたものであった。（ACAC: 71）

夕食を取って始まった会議二日目の夜、軍事最高責任者の周恩来が、二日間の討論を総括する発言を行った。第五回「包囲討伐」の失敗の責任は、全て私個人にある。中央におかれては、私自身の職務を解いて、これまで正しい軍事原則に従って、敵の進攻を巧みに撃退してきた人物を軍事の指導者に充てて欲しい。私は、軍事指揮権を党に返す決心をした。新しい野戦軍の指導者には毛沢東同志を推薦したい。（BYM: 120-121）

この一六日二四時（一七日の午前零時）、朱徳は、遵義會議の結論にもとづき、各軍団に新しい進軍・待機命令の電報を發した。

我が野戦軍は赤水地域へ移動して、新しい部署に就くべく、一七日の行動を以下のように確定する。一軍団は松坎地域に結集して部隊の縮小を行い、綦江と赤水の兩方向を偵察、警戒せよ。九軍団（第九団は欠員）は湄潭から綏陽と桐梓へと前進せよ。五軍団の主力は深溪水およびその周辺に移動し、一八日に遵義を経て桐梓に前進する準備に入るべきである。三軍団は濫板凳まで結集せよ。中革軍委縦隊はしばらく遵義に待機するものとする。²³

黎平會議で決定した根拠地建設の方針を受け継ぎ、赤水へとさらに遊撃戦を展開し、四川の西北部まで部隊を展開する戦略が、こうして動き出した。

三 一月一七日の「七項決定」

一月一七日は、各軍団の責任者を除いた中央書記処、中央政治局の成員一〇名（博古、洛甫、周恩来、陳雲、王稼祥、毛沢東、朱徳、劉少奇、鄧発、凱豊）が集まり、人事を議題とする組織會議を開いた。²⁴

最も重要な人事決定事項は次の三つである。

- (1) 毛沢東（中央政治局委員）を中央書記処書記に補選する。（ZYWY: 1184）
- (2) 康生（中央政治局委員）を中央書記処書記に補選する。（ZYWY: 1184）
- (3) 羅邁（候補中央委員）を中央委員に補選する。（ZYWY: 1181）

毛沢東の躍進については、広く知られていよう。モスクワにいた康生の抜擢はコミンテルンとの意思疎通を円滑にするためのものであり、羅邁の中央委員復帰は、中央組織部長として「長征」初期の行程計画を取りまとめた彼を、博古が手放すことを欲しなかったからである。²⁵

さて、台湾の国立政治大学国際関係研究センターに、郭華倫という世界的な中共党史研究者がいた。彼の本名は郭潜。元中共紅軍幹部で、一九四二年に中共から国民党に投降した前歴をもつ。彼の名著『中共史論』は、陳然という元中共黨員が自分の保管する党内機密文書を紹介しながら、中共の歴史を評論するという独特の叙述スタイルを採る。陳然が郭華倫その人の分身であるのは言うまでもない。

この郭華倫『中共史論』第三冊と第四冊に、遵義會議を考察した大論文を収める。同書の初版を上梓した一九六九年は、アメリカの中国近代史研究者ジェローム・チェン（陳志讓）が、遵義會議の決議を、晋冀豫魯（山西・河北・河南・山東）中央局刊行の『毛沢東選集』二巻本（一九四八年）から英訳し、アメリカの中国学界に凄まじい反響を巻き起こした時期だった。²⁶ 中ソ対立の渦中、すでにソ連が一九四八年版『毛沢東選集』にもとづいて、決議をロシア語訳し、それが一九三五年に書かれたものではないことを主張していた。（ACAC: 106）チェンらの議論は、この動きに触発されたものだった。郭華倫もまた、アメリカヤソ連での討論に刺激され、紅第三軍団の党務委員会委員で

あつた陳然の証言として、決議案とは別に「九項決定」がまとめられたことを明らかにした。²⁷ もっとも陳然の提示した「九項決定」には、幾つかの事実誤認や日時の混乱があつて、うち二項は、後日の決定に属するから、ここからは除外すべきである。以下に、この「九項決定」を紹介するが、記述の誤りや、別に留意すべきことを、「補注」のかたちで、各項の末尾に追記する。

- (1) 秦邦憲（博古）の中共中央総書記の職務を免じ、張聞天（洛甫）を後任とする。
- (2) 周恩来の中共中央軍事委員会主席の職務を免じ、代わりに毛沢東を担当とする。
補注…「長征」当時、中央軍事委員会の軍権は、中華ソヴェト政府中央革命軍事委員会（「中革军委」）が代行した。その中革军委主席は朱德、副主席は周恩来、王稼祥である。周恩来が解任された軍職は「三人団」の軍団長である。また、毛沢東が中革军委の主席になるのは、三五年一月を待たねばならない。本項は、正しくは「周恩来の『三人団』軍団長の職務を免ずる。」とすべきである。
- (3) 毛沢東を政治局委員及び政治局常務委員に補選する。（項英の政治局常務委員の欠員に代える。）
補注…当時、中央政治局常務委員会は中央書記処と呼ばれた。また、毛沢東は六期五中全会選出の政治局委員である。本項は、正しくは「毛沢東を中央書記処書記に補選する。」とすべきである。
- (4) 秦邦憲を総政治部主任に、羅邁（李維漢）を総政治部組織部長に、凱豊（何克全）を総政治部宣傳部長に異動する。
補注…秦邦憲の異動はこれで良い。しかし羅邁は、第二野戦縦隊司令員として別名、羅邁縦隊を率いたが、国軍に大破された責任を問われ、第二野戦縦隊が中央縦隊に合併された際、中央委員に補選されたうえで、紅軍総政

治部地方工作部部长へと異動した。(ZYWX: 367) 凱豐の職位は共產主義青年団書記だが、同職への就任は遵義會議の前である。(ZYWX: 287)

- (5) 陳雲をソ連に派遣し、コミンテルンに、中央ソヴェト区からの撤退と西征の状況、および今回の會議の決議と中央改組の決定を報告し、批准を求める。

補注…ここに記す措置は、後日、博古が総書記の職位を洛甫に譲ったときになされた。「九項決定」から除くべきである。

- (6) 潘漢年を白区に派遣し、香港と上海を拠点にして、白区における党の組織工作の連絡や整頓に当たらせる。

補注…(5)と同じく、この決定も後になされたもので、「九項決定」からは除かねばならない。なお、潘漢年に与えられたミッシェンには、党の再建以外に、コミンテルンに対する近況報告が含まれる。

- (7) 北方に発展し、次いで四川省南部で長江を北へと渡り、紅第四方面軍と合流する準備をし、張国燾および紅第四方面軍に、合同作戰に関する電報を打つ。

補注…一月二日に「中共中央政治局、中革軍委の中央紅軍が北の長江を渡り、四川に転入することに関して紅四方方面軍に送る電報」(JDYL 12: 33-34)が出された。

- (8) 速やかに現地にて紅軍を拡大し、部隊を整頓し、師レベルの単位を取り消して、機構の簡素化を図り、幹部を下放し、団レベルの指揮能力を強化して、連隊の戦闘力を充実させる。

- (9) 會議の決議を伝達して、政治動員を進め、士気を高めて、悲觀的な感情を肅清する。²⁸

「九項決定」は、実際には「七項決定」と称すべきものであった。ところで一月一七日の決定事項については、陳雲のほかに、陳雲の記録がある。

陳雲は、この年の一〇月一五日に、モスクワで開かれたコミンテルン執行委員会書記処緊急会議で報告した際、遵義會議に関する二つの文献を残した。その中の「(乙) 遵義政治局擴大會議」と題されたメモの断片には、一月一七日の「決定」として、次の四項が列挙される。(ここでも、メモ中の「常務委員会」は「中央書記処」と読み換えるべきである。) 現在の中共は、このメモ断片の名称を「遵義政治局擴大會議傳達提綱」としたうえで、その作成日時を「一九三五年二月あるいは三月」に比定し、遵義會議の綱領的文書として位置付けている。²⁹⁾

- (1) 毛沢東同志を常務委員に選出する。
- (2) 洛甫同志に決議の起草を命じ、常務委員会に委託して審査の後、支部に配布して、討論に委ねる。
- (3) 常務委員会で追って適切な分担を決める。
- (4) 三人団は取り消すが、最高軍事指導者の朱徳と周恩来は、引き続き軍事の指揮者を務め、周恩来同志を、軍事の指揮において最終決定を下す責任者に、党が委託する。(JDYL 12:120)

「七項決定」に比べれば、新たに決まった党の組織問題の、ごく一部しか取り上げられていないことが判る。陳雲は、モスクワで遵義會議に関する報告を行うに際して、モスクワが関心事とする最高権力の異動や毛沢東の処遇に絞って、決定事項をまとめたのであって、これを一月一七日に決まった全てと解することはできない。毛沢東、康

生、羅邁の三つの人事のうち、二つに言及するのは、陳然が残した「七項決定」であり、これが目下のところ、歴史の真相に最も近い文献であると言えよう。

さて、この「七項決定」は、中央の組織原則に照らせば、中央書記処書記と中央政治局委員の票決をもって批准したはずである。ところが、今もって遵義会議は全員一致で閉幕したかのように描かれている。その実、同会議が薄氷を踏むような危険な綱渡りの連続であったことは、中央書記処書記に返り咲いた毛沢東本人が告白していることなのである。

一九四五年六月一〇日、毛沢東は中共第七回全国代表大会の最中、「第七期候補中央委員選挙に関する問題」という講話を行った。九日になされた候補中央委員の選挙で、王稼祥が二〇四票を得たが、過半数に達せず、落選した。毛が話題にしたのは、そのことだった。「王稼祥同志が六期四中全会から多くの路線の誤りを犯してきたのは事実である。しかし、彼の功労は、そうした汚点を償って余りある。」毛は、王稼祥の功労を示す事例の一つとして遵義会議を挙げた。

遵義会議は一つの鍵であり、中国革命に及ぼす影響は巨大だった。しかし、皆も御存じのように、洛甫と王稼祥の二人の同志が第三回「左」傾路線から離反することがなければ、遵義会議は順当に開かれなかっただろう。同志諸君は、私の名前を使って、どれだけ金を借りても良いが、彼ら二人を忘れることが絶対にあってはならない。もちろん、遵義会議の参加者にはまだ良き同志たちがおり、ずいぶん前から遵義会議の機運は存在した。こうした同志の参加と賛成がなければ、彼らだけでは、どうしようもなかっただろう。けれども、彼ら二人が、第三回「左」傾路線か

ら離散した影響は巨大だったのだ。³⁰

こう述べた上で、毛沢東は、王稼祥を、その功労に免じて、候補中央委員に補選願えないだろうか、中央委員たちに打診したのである。

洛甫と王稼祥が、遵義會議の直前、毛沢東を戴く「トロイカ」を作って、博古指導部の奪権を図り、それに成功したのは周知のことだった。しかし、なぜ、王稼祥に限って、その功労が特筆大書されねばならないのか。一九七三年五月二五日の中央政治局會議において、毛沢東は王稼祥の再起用を提案した。王は六二年以後、對外聯絡部長の活動において「三和一少」³¹の誤りを犯した廉で失脚に追い込まれていた。毛は王を再起用する理由として、彼が遵義會議の票決において「決定的な一票」を投じたと言ったのである。³²

一九三五年一月一七日に、人事案件を含む「七項決定」は票決に付されたのだ。議決権を有するのは中央書記処書記と中央政治局委員であつて、ここに中央政治局候補委員、紅軍の各軍団幹部、コミンテルン軍事顧問、通訳、まして出席者は含まれない。当日、投票に臨んだのは、だから、次の七人であつた。

博古〔総書記〕、洛甫、周恩来、陳雲、王稼祥、毛沢東、朱德

毛沢東が「決定的な一票」と呼んだ以上、王稼祥は最後の投票者である。彼が投票する直前、「七項決定」には賛成が三票、反対が三票の同数だった。では、これら賛成票三、反対票三の具体的な人名はどのように特定できるか。

まず、賛成票三に関しては、先に見た議事の模様から推して、洛甫、周恩来、毛沢東であることはほぼ確実であ

る。すると、反対票を投じた三人は、消去法で、博古〔総書記〕、陳雲、朱徳ということになる。

博古が「七項決定」に反対したことは容易に予測できるが、陳雲、朱徳については、にわかに信じ難いものがある。しかし、二人のキャリアや遵義会議での発言を吟味すれば、二人の投票行動は少しも意外ではない。

陳雲は一九二五年、五三〇運動に参加した際、中共に加入。上海で地下工作活動を始めた。六期三中全会で候補中央委員に補選。王明らソ連留学生グループの奪権が成功した四中全会で中央委員に昇格。三二年三月には政治局常務委員に抜擢された。(ZWWY: 82) 入党からわずか七年に満たないこのスピード出世は、陳雲が王明、博古らソ連派の厚い信頼を得ていたことを裏側から証明する。五中全会選出の中央書記処書記として、彼は「七項決定」に賛成することはできなかった。

朱徳は、第五回「包囲討伐」反対戦争の間、中革軍委主席と紅軍總司令の地位にあった。だが遵義会議では、周恩来と相違して、自己の軍事責任について反省や謝罪の言葉を一言も発しなかった。一方で、「そのような誤った指導が今後も続くならば、我々ははや一步も前に進むことはできない！」とブラウンを叱責し、博古に引導を渡した。敗戦の責任を自分が一身に担わねばならないこと、賛成票を投じることは敵前逃亡に等しいことを、彼は良く自覚していた。

井岡山の闘争時代から確執が絶えなかった朱徳はともかく、陳雲が反対票を投じたことを、毛沢東は決して忘れなかった。一九六三年六月のことである。毛沢東は、視察先の武漢にて、遵義会議に関する逸話を幹部たちに語った。当時、中央対外聯絡部長だった王力が、それを書き留めている。この日、毛の語るこの逸話を聞いたのは、劉少奇、鄧小平、彭真、康生、陳伯達、吳冷西、姚溱、そして王力だった。

「長征」の途上、彼ら派閥がダメだということが暴露された。彼らはスターリンの所から来た者たちだ。政治局で會議を開くと、反対はいつも私の一票だけだ。私はそのうち病で倒れた。王稼祥も負傷し、我々二人は担架で運ばれたが、一緒にいる間、稼祥を説得し、彼の方も私の多くの意見に同意してくれた。王稼祥を通じて、洛甫（張聞天）も説得した。洛甫も考えを変えた。だが、後で別の人間を説得したが、彼らの考えを変えることはできなかった。彼らはスターリンの聖旨を後生大事に守った。政治局を開けば、決まって三票対四票だ。私の派閥は、私が一票、稼祥が一票、洛甫が一票。彼らの派閥は、博古が一票、オットー・ブラウン（スターリンの所から来た軍事顧問）が一票、××が一票、×××が一票。いつもこんな具合で、三対四だ。これでは埒が明かない。後で軍事情勢がもっと酷くなると、彼ら派閥もごまかしが効かなくなつた。そこで私は提案した。こんな會議をいくら開いても無駄だ。もっと参加者を拡大し、各軍団の一級幹部まで広げれば、そこには、私の意見に賛成の者もあるし、君たちの意見に賛成の者もある。政治局拡大會議を開いて決着を付けようではないか！ 彼らも同意した。こうして開かれたのが遵義會議だつた。³³

ここで、毛沢東は遵義會議前の中央政治局會議で、自分に反対する派閥は、博古、ブラウン、××、×××の四人だつたと書いている。当時の中央書記処書記の名簿（博古、洛甫、周恩来、陳雲、張國燾、王明、項英）から、紅一方面軍の「長征」に参加しなかつた張國燾、王明、項英を除き、毛沢東が自分の派閥と呼ぶ洛甫も省けば、伏字の××が周恩來を、××が陳雲を指すことが判明する。周恩來は、遵義會議で毛を支持したが、この談話がなされた一九六三年当時、毛の極左經濟政策に抵抗したことで、毛の糾弾を受けていたから、敵対派閥に入られている。しか

し、それよりも重要なのは、毛沢東が、西征途上の陳雲を自分の派閥と見ていなかったことなのだ。

陳雲や朱徳が遵義會議の反対者であったことは、中共にあつては絶対のタブーに属する。「決定的な瞬間に、陳雲は毛沢東に一票を投じた」と、事実と逆の記述をする者もある。³⁴しかし、毛沢東への権力委譲には強い異論があつた。一九三五年のほぼ全ての期間を通じて、遵義會議で獲得した毛沢東の政治権力は、何度も危険にさらされるのである。

四人々が見たのは、「総括決議」ではなく、「教訓決議」である

毛沢東が『六大以来』に、「中央の敵の第五回『包囲討伐』」に反対することに関する総括決議（遵義會議、一九三五年一月八日政治局會議通過）と題して収録した文献は、今では、「中共中央の敵の第五回『包囲討伐』」に反対することに関する総括の決議（一九三五年二月八日中央政治局會議通過）という名前で知られる。

この決議に関する中共中央の公式見解は、こうである。³⁵

二月五日、四川・雲南・貴州の境界にある鷄鳴三省村で、博古は、第五回「包囲討伐」に反対する戦争に敗北した責任を取り、総書記の地位を、洛甫に委譲することに、ようやく同意した。八日、紅軍の主力部隊は雲南の扎西とその周辺に進駐し、そこで休憩を取った。このとき、総書記の洛甫起草を委託した「中共中央の敵の第五回『包囲討伐』」に反対することに関する総括の決議が政治局會議を通過した。これが遵義會議の正式決議で、一四・一五五〇〇〇字の長大な内容である。同日、中央書記処は「中央政治局擴大會議の第五回『包囲討伐』」を粉碎する戦争にお

ける経験教訓決議大綱」という一一條・二〇〇〇字余りの決議の要約版も作成した。党内に遵義會議の精神を広く伝えるための文書である。

本稿では、前者を「総括決議」、後者を「教訓決議」と称する。

二つの決議を詳しく分析した代表的な研究に、ベンジャミン・ヤン（楊炳章）の著書がある。ただ、ヤンが、「教訓決議」と「総括決議」が二月八日という同じ日に公表されたという、中共中央の説明を全く疑っていないのは問題である。³⁶「総括決議」は、『六大以来』に収録されるまで、誰も見たことがなかったのだ。遵義會議に関する情報は、なるほど、二つの決議を発表したと言われる二月八日から、ほどなくして、紅軍機關紙が取り上げ、紅軍兵士の回想録でも言及される。しかし、機關紙や回想録が取り上げる遵義會議の「決議」の中身を精査すれば、当時の関係者が話題とする決議が「教訓決議」を指すものであることに気付くだろう。

楊尚昆はその回想録に、遵義を撤退後の初めての戦闘（一月二十七日の土城戦役）に惨敗した後、彼が率いる紅三軍団に動揺が走ったことを記している。中央は、紅三軍団の動揺を鎮めるために、劉少奇を派遣して、遵義會議の精神を報告させることにした。他に、陳雲も同じ目的で、紅五軍団に派遣されたと言う。³⁷ただし、「決議」の公表日は二月八日であるから、劉少奇や陳雲がこのとき「決議」そのものを紅三軍団や紅五軍団に伝達したのではない。

遵義會議の報告の最も早い記録は、洛甫が二月一〇日、扎西で行ったもので、中国革命博物館に、伍雲甫の記録した原稿が残されている。決戦防御の提示、「三人団」の持久戦理解への批判、福建事变における戦略配置の失敗や、西征における「引越し」方式への批判、四川・貴州・雲南の軍閥打倒と根拠地建設などの諸点を論じ、「教訓決議」の内容と酷似する。³⁸遵義會議に参加できなかった羅邁も、この日の洛甫報告によって初めて「三人団」の「單純防

御路線」の誤りを知ったという。³⁹

二月一六日には、中革军委縦隊の各分隊が、白沙駐屯地で、洛甫が一〇日に伝えた遵義會議決議の報告を聞いた。⁴⁰ 二月一九日、中革军委縦隊の幹部會議でも決議案が口頭で紹介される。陸定一に編集長が代わった総政治部機關紙『紅星報』が、そのことを伝えている。同記事には、「洛甫同志の第五回『包圍討伐』に反対する総括報告に完全に同意し、党中央政治局の決議を一致して擁護する」と記す。「総括報告」とあるが、これは「総括決議」を指すものではなく、一〇日の洛甫報告の詳しい紹介である。

三月四日付『紅星報』にも、遵義會議関連情報が確認できる。「作戦の継続を準備し、周（渾元）縦隊と四川軍閥を消滅させよ」という見出しの記事に、「この勝利は党中央政治局擴大會議が華夫同志の單純防禦路線に反対し、正確な軍事指導を採用した後の勝利である」と書かれている。⁴¹ ここにも「総括決議」に関する言及はない。⁴²

この日、紅軍に前敵司令部が設けられ、朱徳が前敵司令員、毛沢東が前敵政治委員に就任した。（IDYL 12: 124）この人事決定は、紅軍の戰略立案に大きな影響を与える措置であった。毛沢東が軍事指導者に復帰したことを通知する必要から、『紅星報』は、遵義會議の情報を併せて伝えたのである。

紅一軍団政治委員の聶榮臻が残した次の回想は、各部隊で遵義會議決議が伝達された時期が、この三月四日前後に集中していたことを示す。

遵義會議の伝達については、軍事情報がいつも緊迫していた状況で、電報や個別伝達の形式で団以上の幹部に、ひとまず報告するのがやっとだった。正式に伝達したのは、二度目の赤水渡河から戻って、遵義を再び攻略した後、遵

義において中央が団以上の幹部を招いて会議を開いた折である。その会議で、洛甫と周恩來同志が話をした。それまで王明路線の打撃を受けていた幹部が、既往の誤った指導や、それが革命にもたらした損失を語ると、兵士たちは怒りの余り、テーブルをこぶしで叩き、腰掛けを鳴らした。私が連以上の幹部に伝達したのは、仁懷県の何とか場という鎮でのことだった。地主の建物で伝えた。その日はちょうど小雨が降っていて、譚政同志が私に傘を差し掛けてくれた。幹部は一心不乱に耳を傾け、数時間の伝達の間、雨を避ける者はなかった。皆が毛沢東同志の指導を擁護した。⁴³

聶榮臻はここで、二度目の赤水渡河から遵義へと急行し、遵義を再び攻略した後、遵義城において、遵義會議の伝達がなされたと述べる。紅一軍団は遵義攻略の最前線で戦い、二月二八日未明には遵義城に一番乗りしている。戦闘が終わったのが三月一日である。繰り返せば、三月四日、紅軍は作戦指揮の統一を期し、遵義に前敵總司令部を設けて、朱徳を司令員、毛沢東を政治委員に任命した。五日午後三時、遵義県革命委員会は、紅軍の遵義再占拠を祝う祝賀大会を開き、紅軍總政治部代理主任の李富春が、重要講話を行なっている。⁴⁴ 聶榮臻が書く遵義會議伝達は、この五日の祝賀大会での出来事だった。

他方、郭華倫は、『中共史論』四版、第三冊で、遵義會議決議の伝達が「鴨溪滞在中」のことだったという陳然の証言を引く。⁴⁵ 陳然は、先に書いた通り、紅三軍団の党務委員会委員だった。⁴⁶ 紅三軍団が「鴨溪」に滞在した日時は、「長征」の史実に照らせば、三月一〇日前後か、四月一六日前後のいずれかである。⁴⁹ 彭徳懷は軍団長として、三月八日に、紅三軍団の団以上の幹部會議で遵義會議の状況報告をしたから、郭華倫が遵義會議決議のことを聞いたのは、そのときであった。中央も同日、全軍団に貴州進撃命令を発動した。その布告「中共中央の敵の新たな包圍

攻撃を粉碎し全貴州を赤化するために全党同志に告げる書」が、遵義會議の精神にもとづいて、紅軍の勝利を獲得しようとして、兵士たちを鼓舞している。(JDYL 12:129)

金沙河の渡河作戰の成功を受けて、四月二十九日に書かれた「総政治部の金沙江を渡り四川省西部に転戦することに関する政治工作訓令」にも、遵義會議への簡単な言及がある。(JDYL 12:149) この布告は、一九三四年末の黎平會議で、四川省への根拠地拡大が決議されてから、四か月もの間、赤水渡河を繰り返して、貴州、四川、雲南を転戦したが、今やようやく当初の進軍計画を実行できる段階に立ち至ったことを、兵士たちに告げるものであった。

遵義會議の「決議」が確実に伝えられたことが実証できるのは、二月二十八日に、紅第二、第六軍団宛て送付された「中共中央の二、六軍団、四方面軍及び中央軍区に致す電報」のみである。「第五回『包圍討伐』反対戦争や、最近の政治情勢に関する中央の判断、分析、重要決議」について至急知りたいという紅第二軍団政治委員、任弼時の緊急電報（二月一八日発⁵¹）に洛甫が回答した文書だが、中身は冒頭の十数語を除き、「教訓決議」と全く同一である⁵²。

紅第四方面軍が、この「教訓決議」を受け取ったという情報は、今のところ見当たらない。しかし、上海臨時中央局には確かに届いている。ただ、党内機関紙『闘争』第七九期がこの決議を掲載するのは、陳雲と潘漢年が党再建のため同地を訪れた後の七月五日になってからだった。陳雲は、モスクワにこの「教訓決議」を持参しなかったようである。一〇月一五日に開かれたコミンテルン執行委員会書記処緊急會議には「教訓決議」を検討した形跡が全くないからである⁵³。

以上の文献探索を総合すれば、次のように結論づけてはば間違いはない。二月八日に公表された遵義會議決議とは「総括決議」ではなく「教訓決議」である。「総括決議」を見た者は、当時の中共中央と紅軍関係者の中には皆無だった。

さて先に紹介した郭華倫の議論に触発された鄭学稼は、その遺作『中国共産主義運動史』において、「総括決議」には改竄の跡があるという大胆な仮説を提出した。ただ、彼もまた郭華倫と同じように「教訓決議」を知らなかったので、陳然が記録した不十分な決議メモを「総括決議」と比較するほかはなかったし、当時の研究の逃れ難い限界として、「総括決議」が一月八日に起草されたという毛沢東の発言を何の疑いもなく受け入れていた。しかし「総括決議」が、一月八日以後の戦局の変化を前提しない限り、決して書くことができない内容を多々含んでいることを、今の研究者は知っている。鄭学稼は、「総括決議」が偽物である根拠を一〇項目挙げたが、そのうちの八つは、一月八日以後の内容がこの決議に含まれていることから結論づけられたものだ。したがって、現在の研究水準から見ても、鄭学稼の仮説のほとんどは説得力を失ったと言つて良い。ただ、彼が主張した残る二つの論点は、なお十分な検証に値する。

鄭学稼によれば、「総括決議」は、(1)毛沢東の『中国革命戦争における戦略問題』をもとに書き直され、(2)福建事变と一九路軍に対する評価をめぐり、コミンテルン第七回大会の反ファシズム人民戦線の主張を、後から加筆した文章だった。この大胆な仮説を、これから再検討してみよう。

五 『中国革命戦争における戦略問題』との関係

鄭学稼はこう書いている。

原決議（陳然の決議メモ）は長大な紙幅を割いて第五回「包囲討伐」の軍事路線を批評するが、「決戦防御」と「専守防御」を使用せず、「単純防御」（消極防御）や「攻勢防御」（積極防御）を繰り返し使用する。「決議案」（「総括決議」）は、毛沢東の『中国革命戦争における戦略問題』（一九三六年二月）が用いる術語である「決戦防御」と「専守防御」に依っている。

『中国革命戦争における戦略問題』（以下、『戦略問題』と略）は、『毛沢東年譜（一八九三―一九四九）』修訂本、上冊によれば、一九三六年一〇月二七日から、保安の紅軍大学一科（上幹隊）で同名の講義として開講されたが、第五章第九節「殲滅戦」を最後に、未完に終わった。一二月一二日に西安事変が勃発した後、その対応に追われ、講義を続ける余裕を失ったからである。⁵⁴ 受講生の一人、戴鏡元の講義ノートが残っている。⁵⁵ 初版は、三六年、華北新華書店が発行した謄写版印刷。最初の単行本は、四一年に八路軍軍政雜誌社が発刊したもので、二月二三日の毛沢東の序文を付す。⁵⁶ 四一年二月と言えば、『六大以来』の初稿が揃い、毛沢東がその修正チェックの作業を始めた「二月初め」と一致する。⁵⁷ 『戦略問題』と「総括決議」の編集作業は完全に並行していた。

鄭学稼が問題視した「総括決議」と『戦略問題』の間の密接な関係については、一九七七年八月二三日、文化大革命後に開かれた、遵義會議記念館責任者とのインタビューの席上で、陳雲がすでに指摘していた。⁵⁸ 「毛主席が遵義會議で説いたことは条理の通ったものだった。それは、『戦略問題』の文章でも説かれたあの内容である。」ただし陳雲は、『戦略問題』の術語が「総括決議」に使われている以上、後者には改竄された疑いがあると、明示的に述べたわけではない。

郭華倫の告発の成否を検証するには、「総括決議」と『戰略問題』の中で、「決戦防御」と「攻勢防御」（積極防御）、「専守防御」と「單純防御」（消極防御）といった術語が、どのように用いられているかを確認せねばならない。「総括決議」四には、毛沢東が第五回「包圍討伐」に反対する戦争を遂行するうえで最も理想と考える戦略が、こゝまとめられている。

こうした状況下において、我々の戰略路線は決戦防御（攻勢防御）であつて、優勢な兵力を集中して、敵の弱点を選択して、運動戦のなかで確信をもつて敵の一部あるいは大部分を消滅させ、敵を個別に撃破し、「包圍討伐」を粉碎することではなければならない。ところが、第五回「包圍討伐」に反対する戦争においては、單純防御路線（あるいは専守防御）によつて決戦防御に替え、陣地戦堡壘戦によつて運動戦に替え、さらには、いわゆる「短距離突撃」の戰術原則によつて單純防御の戰略路線を支持することになった。このため、敵の持久戦や堡壘主義の戰略戰術という目標が成功することになり、我々の紅軍主力が部分的な損失を被り、中央ソヴェト区根拠地を離れざるを得なくなつた。こうした路線は、我々紅軍が勝利を得るための戰略戰術の基本原則とは全く相反するものであると指摘せざるを得ない。（JDYL 12: 51）

この「総括決議」の戰略は、鄭学稼の述べる通り、『戰略問題』の遊撃戰論を、第五回「包圍討伐」に反対する戦争の具体例に即して説いたものである。『戰略問題』には、こゝある。

積極防御は、攻勢防御とも呼ばれ、決戦防御とも呼ぶ。消極防御は専守防御とも呼ばれ、単純防御とも呼ぶ。消極防御は、実際には偽の防御であり、積極防御だけが真の防御であって、反攻と進攻のための防御である。私の理解する限り、読む価値のある軍事書、より聡明な軍事家の中で、古今東西を問わず、その戦略戦術の如何にかかわらず、消極防御に反対しなかったという例はない。最も愚かな者、最も狂った者だけが、消極防御を至上のものと持ち上げる。ところが世の中にもまたこのような者がいて、消極防御を行うのだ。これこそは戦争の過失であり、軍事上における保守主義の表現であり、我々が断固として反対せねばならぬものなのだ。³⁹

「総括決議」と『戦略問題』の間に強い関連性があると言う郭華倫の推論は、両者の文言を比べる限り、正鵠を得ている。事実、先ほど紹介した晋冀豫魯中央局刊行の『毛沢東選集』二卷本（一九四八年）の目次は、次のように、この二つの文章を掲載した。

・『中国革命戦争における戦略問題』

・附論…中央の敵の第五回「包囲討伐」に反対することに関する総括決議」（遵義会議、一九三五年一月八日政治局會議通過⁶⁰）

遵義會議の「総括決議」は、『戦略問題』で説く遊撃戦論の正しさを傍証するための「附論」という位置づけになっている。しかしながら、「決戦防御」という遊撃戦争の術語が遵義會議当時にはなかったという鄭学稼の批判は

的はずれである。彼は「教訓決議」を見ることができなかったのも、そこに「決戦防御」という術語が使われているのを知らなかったにすぎない。遵義會議以後においても、「決戦防御」という言葉は、国軍との戦略方針を策定するうえでの中心術語に据えられている。例えば、二月一日に中央と中革軍委が発した「中共中央、中革軍委の、湖南・湖北の敵の『包圍討伐』を粉碎するために、湖南・湖北・四川・貴州省委および紅第二、第六軍団に与える指針」の第二条（「乙」）には、「諸君は湖南・湖北の敵の指揮における不統一や何鍵部隊の疲弊を利用して、敵が堡壘を離れて前進する際、紅軍主力を結集し、敵の弱点を選んで、時機を失することなく、運動戦のなかで個別撃破すべきである。総方針とは決戦防御であつて単純防御ではなく、運動戦であつて陣地戦ではない」（JDYL 12: 80）と述べる。「決戦防御」を始めとする毛沢東の遊撃戦論の主な術語は、遵義會議のころにはほぼ完成していたと見るべきであらう。

しかし、ここで注意すべきことがある。「総括決議」は、遊撃戦や、外線攻撃、敵の両翼末端からの迂回攻撃などの戦略の、最初の積極的な提唱者が、上海のコミンテルン代表団やモスクワの中共コミンテルン代表団であつたことを強調している。コミンテルンが遊撃戦論の最初の提唱者であることを示す機密電報三つを、「総括決議」は、原文を引用しながら詳しく紹介したのである。

「総括決議」の作者である毛沢東は、自分の遊撃戦論の正しさを立証するために、コミンテルンの權威に助けを求めたのだ。しかし、中央書記処から排除されていた時期の毛沢東には、こうした機密情報へのアクセス権はなかつたはずである。⁶¹では、彼はどこから、それらを手に入れたのだらうか。一九三六年六月一六日にコミンテルンとの無線電信が回復したときから、彼はコミンテルンとソ連の情報を独り占めしている。「総括決議」が載せる最高機密電

報は、彼がそれ以後に収集した情報の一部であろう。「総括決議」が『戦略問題』の概念を先取りしたという理由から、鄭学稼がその改竄を説いたのは間違っている。しかし、「総括決議」は確かに改竄されていた。一九三六年以後に取得したモスクワ機密情報に基づいて、後から加筆がなされていた。

これら三つの機密電報の原文は以下の通りである。なお、電報受取人のうち、アーサー・エーヴェルト (Arthur Event) は、元ドイツ共産党員で、一九三二年から上海のコミンテルン代表、コミンテルン極東局書記。マンフレート・シュテルン (Manfred Stern) は別名クレーベル (General Kléber)、またフレード (Fred) をも名乗るモルドヴァ人で、ソ連のGRU (国防省参謀本部情報総局) の諜報員。三二年より、中央ソヴェト区の軍事顧問団総顧問を務めた。三つ目の電報の差出人である王明、康生は、それぞれ中共コミンテルン代表団の団長と団員。

代表 (エーヴェルト) とフレード (シュテルン) 宛て、中央へ転送されたし。我々のごく最近の作戦行動に対する考えをここに發送する。討論に付すように。我々の考えでは、我が指揮部の計画と措置は、特にここ最近になって、あたかも敵に強いられたかのように、我が部隊に余計な部署を新設した後、絶えず部署を移転したことに災いされて、部隊が積極的に戦闘に参加する能力をしだいに減退させているように思う。我々がすでに実績を証明済みである、敵の局地殲滅作戦を続行すべきであって、全線で同時に敵に打撃を与えようとすべきではない。実際のところ、誰もが知るように、我が軍は、敵が堡壘を築いた地域を突破する戦闘ではなくて、運動戦によってこそ偉大な勝利を獲得できるのだ。我が軍のもつ有利な状況、すなわち、我が軍の機動作戦と、両翼末端より敵に突撃進攻する能力を充分に活かして、遊撃隊を後方から敵に向かって一斉に進攻させよ。重要なのは、敵の集団軍を殲滅させる場面にお

いて決定的な勝利を奪取することである。政治委員会。⁶⁴

代表（エーヴェルト）宛て、中央へ転送されたし。（4）新しい補充人員を動員するうちに、中央ソヴェト区の資源はまだ枯渇していないことに気づいた。紅軍の作戦部隊の抵抗能力や後方の精神状態などは、杞憂すべき段階に達していない。主力部隊が暫時、中央ソヴェト区を撤退することは必要であり、その準備を進めることは確かに時宜に適っている。だが、こうした準備は、あくまで人的戦力が打撃を被るのを防ぐための撤退なのだ。／コミンテルン第三回プレナムと中共六期五中全会決議をめぐる討議にもとづいて、闘争の前途や目標の困難、および紅軍が臨機応変な策略を採る必要性について説明を行うように。そうした目標とは、何よりもまず、人的戦力を温存し、さらにそれらを発展、強化させて、新たな条件を創造し、有利な時機を捉えて、日本や他の帝国主義軍隊、国民党軍隊に対して広範な進攻を行うことにほかならない。⁶⁵

遊撃戦争の広範な展開、紅軍が敵の両翼末端へと迂回してゆく機動戦術、および紅軍が必要な弾薬や薬品を奪取できる可能性の有無について、我々に伝えること。⁶⁶

毛沢東は自己の遊撃戦論の正しさを証明するために、躊躇うことなく、モスクワの權威を借りたことになる。「総括決議」の議論は、モスクワへの反逆者、六期四中全会以来の中央のコミンテルン盲従に対する告発者という、現在流布する毛沢東のイメージとはそぐわないものである。一九三六年以後のかなりの時間、彼には、最高指導者の權威

作りのために、モスクワの後ろ盾が必要だった。それが不要になったのは、一九四三年五月一五日のコミンテルン解散以後であつたに違いない。

六 福建事変と一九路軍の評価をめぐって

「総括決議」が偽造された例証として、鄭学稼が取り上げた第二のものは、福建事変に関わる問題である。まず、福建事変の概要を簡単に説明しておく。

一九三三年の夏、第一次上海事変で、国民党一九路軍を率いて日本軍に徹底抗戦した京滬衛戍司令長官、兼一九路軍総指揮の蔣光鼐は、蔣介石から福建の紅軍殲滅を命じられ、江西・広東・福建境界区「包圍討伐」軍第四路軍司令に任命された。しかし、蔣光鼐は蔣介石の紅軍攻撃命令に不服で、第一次上海事変での一九路軍の抗日行動が正当に評価されないことに強い不満をもった。三三年九月、李済深、陳枢銘、蔡廷鍇らとの秘密協議を経て、「反蔣抗日」を決意した蔣光鼐は、福建「革命政府」の樹立に動いた。

九月二二日、一九路軍は、陳公培を延平の前線に派遣し、紅三軍団軍団長の彭德懷との会談で、「停戦合作、反蔣抗日」を掲げて、最高首脳同士の協議を求めた。彭德懷は中央に緊急打電し、紅三軍団政治部主任の袁国平を陳公培との実務協議に臨ませた。総書記の博古は、彭德懷の報告を喜び、この機運を利用して、第五回「包圍討伐」に打撃を与えようとした。周恩来、項英と協議のうえ、中華ソヴェト共和国の首都、瑞金での一九路軍との秘密会議がセツトされた。

九月二四日、一九路軍は総部秘書長の徐名鴻を、中共側は総政治部宣伝委員長の潘漢年を、それぞれ全権代表とする話し合いが始まった。博古は、「一九路軍への道義上、かつ軍事上の直接支持」を表明し、前線の両軍は休戦状態に入った。博古は、福建事変を蒋介石に反対する戦争の新しい形態として積極的に支持した。むしろ、上海臨時中央局の項英や中華ソヴェト政府主席の毛沢東の方が、彼らとの連合にはよほど懐疑的だった。(ACCAC: 62-63)

一〇月二六日、一九路軍と中共は「反日反蔣の初歩協定」を締結した。その協議内容は、双方が軍事行動を停止し、軍事境界を策定し、商品貿易を回復し、反蔣宣言を発表するというものだった。一九路軍は、紅軍が「協議内容の機密保持に責任をもつ」ことを強く求めた。十一月二〇日、一九路軍は南京国民政府に蒋介石からの離反を通電して、福建事変を発動し、二二日、李済深を主席とする「中華共和国人民革命政府」(「福建人民政府」と略称される)が成立した。

ところが、ここで意想外の事件が起こる。上海のコミンテルン代表、アーサー・エーヴェルトが一九路軍との協議内容をメディアにリークしたのである。「共産党の福建に関する見解」というインタビュー記事を、『中国論壇(China Forum)』第二期(十一月三〇日発行)に「中共中共」の名義で発表し、「初歩協定」の内容を暴露した。中共中央は直ちに、コミンテルン執行委員会に対して、エーヴェルトの行為に関する嚴重な抗議を行った。⁶⁷

しかしコミンテルンの側も、一九路軍に対する警戒心の強さでは、エーヴェルトに勝るとも劣らなかった。十一月二三日、コミンテルン執行委員会政治書記処政治委員会は、エーヴェルトに宛てて、「日本帝国主義者が福建事変を口実に干渉を強める可能性」について語っている。⁶⁸ エーヴェルトの『中国論壇』へのリークは、ある意味では、コミンテルンの福建事変に対する疑念を代弁するものでもあった。福建人民政府に強く肩入れした博古も、コミンテル

ンに追隨して、福建人民政府に対して否定的な態度を強めるようになる。二月五日に「中共中央の福建事變のために全国民衆に告げる書」を發し、「福建人民革命政府のあらゆる行動は、過去の反革命的な国民党指導者や政客たちが、新たなやり口で民衆をペテンに掛ける遊戲にすぎない」(JDYL 10: 630-631)と非難するに至った。

一九三四年一月一六日、内通者による軍事情報漏洩の影響で、福州が蒋介石の討伐軍の前に陥落した。一月二五日、救援に駆けつけた紅軍は延平を奪回したが、二二日には、一九路軍の將校が率いる四万人が福建人民政府からの離脱と中央政府の擁護を宣言、一九路軍は崩壊して、その殘党は広東で陳濟棠に接收された。

さて鄭学稼は、この福建事變に対する評価の相違が、「総括決議」を偽造と判断する決め手だとして、こう述べる。「一九路軍に対する態度は、『決議案』(総括決議)と瑞金時代に發表された文献では、全く異なる。毛沢東自身も、陝北に到着してから初めて、福建事變が『革命に有益な行動であったと言わざるを得ない』ことを公に認めた(が、その觀點が『決議案』には反映されているのである。——引用者補足)」

確かに、エーヴェルトの機密暴露の前から、福建事變の反動性を声高に唱え、彼らとの同盟が、反革命陣營を利用することになるという立場を堅持した点で、毛沢東は総書記の博古よりも、ずっと一九路軍との協力に後ろ向きだった。ところが、遵義會議で博古を攻撃する際、彼はかつての自分の誤りを全部博古のせいにした。「教訓決議」⁷⁰と「総括決議」(JDYL 12: 58-59)は、いずれも、当時の博古指導部が一九路軍と蒋介石軍の矛盾を利用して、「包圍討伐」に反対する戦争を有利に展開できなかったことを批判したのである。

鄭学稼は、福建事變が「革命に有益であった」という毛沢東の一九三六年一二月の評価が、「総括決議」に反映されていると考えた。しかし、「教訓決議」も、「総括決議」も、福建事變が「革命に有益であった」とは書いていな

い。中共が福建事変に対する評価を変えるきっかけとなったのは、コミンテルン第七回大会の反ファシズム人民戦線の決議を知ってからで、毛沢東はこの情報を、三五年一月中旬、コミンテルンより密使として陝西に派遣された、中共コミンテルン代表団団員の張浩（林育英）から得た。⁷¹ 福建事変は、反ファシズム人民戦線の数少ない先行例として注目され、それとの統一戦線の結成に失敗した中央中央が、「左」傾のレッテルを貼られるようになった。そうした新しい評価が中共の決議自体に反映されるのは、三五年二月一七日から開かれた瓦窯堡會議においてである。鄭学稼の結論とは相違して、「総括決議」には、瓦窯堡會議の決議のような人民戦線の発想が見当たらない。人民戦線のアイデアを知ったうえで、「総括決議」が書き換えられたとは、到底考えられないのである。

しかしながら、遵義會議を開催した当時の中共黨員のなかには、福建事変を發動した一九路軍そのものに高い評価を与えるべきだと考える人物がいた。「反日反蔣の初步協定」の交渉に臨んだ中共側の代表者、潘漢年はその一人である。福建事変に対するアンビバレントな思いは、陳雲も、潘漢年と同じだった。陳雲は、遵義會議「七項決定」に反対票を投じた。博古指導部の福建事変への対応を一方向的に誤りと決め付けることはできないと考えていた。一〇月一五日、二人はモスクワで、コミンテルン執行委員会書記処緊急會議に参加する。紅軍の最新状況を報告するに当たり、陳雲は、一九路軍に対する中央の対応について、自分の見解を述べた。報告会のために彼が準備したメモ（「乙」遵義政治局擴大會議⁷³）。以下、「報告メモ」と呼称）と、後から整理された報告記録⁷⁴（以下、「史平報告」と呼称）には、それぞれ、こう書かれている。

党中央が一九路軍と作戦協定を締結したのは正しい。だが当時は、軍事指揮において政治上の要求には全く対応で

さず、建寧、黎川、泰寧を出て、側面から延平に前進する蒋介石軍を攻撃せずに、かえって紅軍の主力を贛江方向へと向かわせ、洛甫同志（彼は軍事委員会の委員である）がそれを知って反対の意思表示をしてからようやく、紅軍を東側の永安や沙県まで進軍させようとしたが、その矢先に、福建人民政府の状況の方が変化してしまった。こうして蒋介石は東方戦線における主導権を握り、積極的なソヴェト区攻撃作戦を組織することができた。さらには、個別の指導員（蔣勁光を指す——引用者注）の誤りによって黎川を失守することになった。（JDYL 12: 116-117）

我々は一九路軍に対して不正確な態度を採ったために、まず軍事的な誤りを犯した。蒋介石が陵江を攻撃したときに、軍隊を派遣して反撃すべきだったのに、我々はそうしなかった。それどころか、紅軍の主力部隊が正反対の方向へ向かって、滕蓋（永豊）に進攻したのである。政治局はこの情報を得ると、軍隊をすぐに引き揚げさせたが、すでに蒋介石は一九路軍を制圧した後だった。（JDYL 12: 374）

一九路軍への中央の態度が誤っていたと述べ、「反日反蔣の初步協定」そのものを正面から評価する。そして、洛甫の軍事方針が政治的に正しかったのだと明言している。⁷⁵これは、「教訓決議」や「総括決議」以上に、積極的な福建事変評価であり、中国における反ファシズム人民戦線を思想的に準備した文章と見ることができると。

だが陳雲は、率先して党の支配的な見解に対抗したのではない。コミンテルン第七回大会の閉幕後に、陳雲の報告はなされた。コミンテルン執行委員長には、故国ブルガリアで人民戦線を早くから組織したデイミトロフ（Г. Димитров）が就任していた。彼の主導のもとで、それまでの社会民主主義に対する敵意に満ちた極左政策を乗り

越える劇的な政策転換が図られた。陳雲は、いち早くこの潮流に乗り、紅軍の一九三五年初めからの政治変動を、この潮流にしっかりと結びつけたのである。しかし繰り返すが、それは毛沢東が「総括決議」を書いた趣旨とは異なっていた。

七 陳雲は何時、中央縦隊を去ったのか？

紅軍が瑞金を脱出する直前の一九三四年一〇月七日に、上海臨時中央局、共產主義青年団、労働組合、中央特科が上海警察の大掛かりな摘発を受け、コミンテルンと中共中央を繋ぐ無線電信機二台が破壊された。⁷⁶

中共中央は、遵義会議後、潘漢年と陳雲を上海に派遣して、度重なる摘発によって崩壊状態にあった上海臨時中央局と江蘇省委員会の再建を命じた。併せ、党と紅軍の最新情勢を一刻も早くコミンテルンに伝達するよう依頼した。そのことは、陳然の「九項決定」の第五項と第六項に見える。二人が一九三五年一〇月一五日、モスクワで、コミンテルンに党と紅軍の最新状況を報告したのは、こうしたミッシェンの一環だった。

このミッシェンが何時、潘漢年と陳雲に伝達されたかという問題は、党史研究の懸案事項に属する。また、上海の党組織の再建ならびにコミンテルンとの連絡という、かなり性格を異にする二つのミッシェンの優先順位についても論争が絶えない。『陳雲年譜』修訂版、上冊に記された、これらの諸問題に関する最新の研究成果は次の通りである。

二月末あるいは三月初め 中共中央は陳雲、潘漢年などを上海に派遣し、党の地下工作を回復させることを決定し

た。張聞天（洛甫）は、潘漢年に、上海でコミンテルンとの連絡を取れるかどうかを探るため一足先に出発するよう通知した。潘漢年は指令を受けた後、遵義を出発し、貴陽、柳州、梧州、広州を経て、およそ三月から四月の間に香港に到達し、その後、上海に赴いた。党の組織が上海で深刻な破壊を被ったため、潘漢年は再び香港に戻ったが、陳雲が上海に来ると、再度、彼に連絡を取った。⁷⁷

五月三十一日 中央縦隊に従い、瀘定城に入る。この日の夜、張聞天（洛甫）、周恩来、毛沢東、朱徳、王稼祥、劉少奇などが参加した中共中央責任者会議に出席する。陳雲が後年回想するところによれば、「瀘定橋会議は、紅軍が瀘定橋を奪取した当日の夜に、瀘定橋を過ぎたある場所（部屋の中で、外ではなかった）で開かれた。会議に参加したのは毛沢東、朱徳、周恩来、張聞天、王稼祥と私で、劉少奇、博古、劉伯承が参加したかどうかは記憶がはっきりしない。会議は主に二つのことを決定した。(1)紅軍は北の雪山草原地帯の前線に向かい、人口が稠密した地域を避ける。(2)私を上海に派遣し、白区の党組織を回復させる。⁷⁸」

『陳雲年譜』の記載によれば、潘漢年は上海でコミンテルンとの連絡を取るよう指令を受ける一方、陳雲には、上海の党機関を回復することだけが求められた。⁷⁹ また、「二月末あるいは三月初め」⁸⁰に、上海派遣が決まった陳雲が、瀘定橋の戦役を終えた五月三十一日に、再度、中央から上海行きを命じられている。⁸¹ しかし、五月三十一日を過ぎても、陳雲は中央縦隊を離れることはなかった。

朱徳は六月二日、三路に分かれて天全、芦山に向かって進軍せよという出動命令を紅軍全軍団に出した。⁸² 陳雲は、

その後も七日まで、中央縦隊と一緒に、天全県の北にある靈閣殿まで行軍している。靈閣殿で護送役の地下黨員、席懋昭と落ち合ってから、ようやく中央縦隊と別れて、榮経、雅安を経て成都に向かったと書かれるが、それが一体、何時のことだったかは、今に至るまで記述が曖昧なままである。

『陳雲伝』上冊は、陳雲が「廖家駁」という偽名を使って、成都の『新新新聞』に載せた新聞広告を写真掲載している。⁸⁴これは、成都に無事到着したことを中央に知らせる暗号記事であった。日付は六月二八日。六月二四日に成都に到着し、上海での活動経費を、浙江実業銀行副総経理であった章乃器を通じて、二六日に上海臨時中央局の中共特科宛て送付したことを伝えている。

ところが、この新聞掲載の出来事を、『陳雲年譜』修訂版、上冊は「六月中旬」と書く。⁸⁵「二八日」という新聞広告掲載の日付を一〇日ほど、繰り上げている。周知の通り、六月一二日、中央縦隊の兵士が夾金山を越えたばかりの紅第四方面軍の兵士と遭遇し、翌一三日には、達雅で党中央が紅第四方面軍と劇的な対面を遂げた。一方、『陳雲年譜』では、陳雲が天全で中央縦隊と別れたのが七日と明記されて以降、成都までの行程の詳細を一切記さない。七日出発、二四日到着であれば、天全・成都の行程（およそ一六〇キロメートル）に二週間以上を費やしたことになる。これはどう見ても長すぎる。私の推測では、陳雲は七日以後も天全から達雅までの行程を中央縦隊と共にし、一三日に、紅第四方面軍との合流をその目で確認してから、席懋昭と成都を目指したものと思われる。実際、『任弼時伝』上冊は、六月一三日に紅第四方面軍と合流した達雅の近くにある「懋功」から、陳雲が上海に向かったと明記しているのだ。⁸⁶

陳雲は、党の権力変動が理想的な大団円を迎えたことを見届けたうえで上海に赴いたのである。瑞金脱出以来の党

と紅軍の再建が順調に進んでいることの具体的証拠が揃った段階で、コミンテルンへの報告というミッション実現に向け動き出したのだ。しかし予期に反して、紅第一、第四方面軍は陳雲が中央縦隊を離れてから分裂してしまった。理想的な大団円というシナリオが崩れた。事態に困惑した陳雲は、自分が紅軍と別れた時間を、紅第一、第四方面軍の合流前に引き戻すはかなかった。

陳雲の上海での極秘のミッションは、上海臨時中央局や江蘇省委員会の再建を第一義としたものではなく、遵義会議以来の党中央の大きな人事異動をコミンテルンに伝達し、その了承を得るのを主眼にしたことは間違いない。一九二一年の創設以来、中共の人事異動は全てコミンテルンの事前の承認あるいは直接の介入を経て実現されたものばかりである。一九三四年一〇月七日に上海臨時中央局の無線電信機二台が警察に破壊された後、中共は創立後初めて、自らのイニシアチブで、党の組織運営を進める機会を得た。毛沢東はこの機会を巧みに捉えて、党の最高指導部の一部奪権に成功した。しかし、博古と洛甫の総書記交代をコミンテルンの了承なしに進めることは不可能であった。

八 潘漢年・陳雲ミッションの真の目的と「トリアッティ・メモ」

博古の実弟、秦邦礼（楊琳）に秦福銓という子息がいた。彼は父の口より語られた、博古の生涯にまつわる数多くのエピソードを用いて、博古の伝記をまとめた。彼の死後、その原稿は整理され、二〇〇九年に『博古と毛沢東…および中華ソヴェト共和国の指導者たち』と題して香港で出版された。秦福銓はこの中で、党史研究がこれまでひた隠しにしてきた潘漢年と陳雲の上海行きミッションの真相を公表した。

潘漢年に上海行きを告げたのは、洛甫ではなく、博古であつた。その時間も一九三五年の「二月末あるいは三月初め」ではなく、「二月六日」である。博古が周恩來の説得を受け入れ、総書記の職位を洛甫に譲つた翌日に当たる。部隊は、雲南・貴州・四川三省の境界地帯、雲南省威信県水田寨花房子村に駐屯していた。博古はこう語つた。

権力交代といつても、三つの印章と、文書類を入れた箱を幾つか渡すだけだ。それにもまして重要なのは、コミンテルンへの報告である。コミンテルンに張聞天（洛甫）の総書記繼承を批准してもらわない限り、印章を渡すのみで、コミンテルンの同意も得ずに、私の権力を委譲することなど出来はしない。だから、この任務は君にどうしてもやつてもらわねばならないし、君だけがこの任務を全うできる。なぜなら、私と王明が秘密の連絡員にしようと約束したのが、まさに君だからだ。君が行つて、初めて王明は、これが私の願ひなのだと信じてくれるだろう。今日から二日の内に、旅立つ準備をし、私が今話したことを、何度も頭に叩き込んでほしい。万一の不慮に備えて、私と周恩來は、陳雲も行かせることで、話がまとまっている。陳雲には、周恩來の方から、私が昨日話した意見を伝えてもらっている。ただし、君たち二人は別々に出発するように。どちらが先にモスクワに着いても、報告は君がやるのだ。陳雲はあくまでも君を補助する役目だ。⁸⁷

これを受け、翌二月七日、総書記に就任したばかりの洛甫が、改めて、陳雲と潘漢年を同時に呼び、モスクワ行きと、コミンテルンと王明への遵義會議の決議報告というミッションを授けたのである。

二月一〇日、紅軍が威信から雲南に向けて進軍を始めてから、潘漢年は商人に変装して南下し、雲南、香港を経て

上海に入り、再び上海を出た。陳雲の方は、先ほど見たように、紅第四方面軍との合流を確認した六月一三日以後、中央縦隊を離れ、成都を経て重慶に出、そこから汽船で上海まで長江を下った。

八月初め、陳雲と潘漢年は上海で再会した。陳雲は、再建されたばかりの上海臨時中央局の手配で、楊子華、陳潭秋、饒漱石など八人の党員と一緒に、ソ連製貨物船に乗り、ウラジオストークからシベリア鉄道経由で八月二〇日、モスクワに到着した。潘漢年の到着はすこし遅れて九月中旬であった。⁸⁸

モスクワではコミンテルン第七回大会が閉幕したばかりだった。王明はこの大会で、コミンテルン執行委員会委員、主席団委員、書記処候補書記に就任した。王明は潘漢年と陳雲から、遵義会議の状況と、総書記の職位を博古が洛甫に委譲した報告を受けた。ソ連留学生グループの洛甫が総書記を受け継いだことに、王明は一先ず安堵した。一〇月二日、コミンテルンは、洛甫の総書記就任を批准した。(BYN: 151)

もう明らかだと思うが、王明、博古、洛甫らソ連留学生グループは、中共最高権力の異動を、自分たちの派閥のなかの役割分担によつて解決し、そうした権力変動がもたらす衝撃を極小化することを目論んでいた。潘漢年と陳雲のミッションは、ソ連留学生グループ内での権力交代に関する認可をスターリンから得ることを、隠された、しかし真の目的としていた。

不運なことに、モスクワでは博古や洛甫が全く想定しなかった事態が進行していた。スターリンは、中国革命の指導者に毛沢東を充てる考えを固めていたのである。⁸⁹

潘漢年を主、陳雲を従という、博古や洛甫が当初計画したミッションの序列は、逆転を余儀なくされた。潘漢年が遵義会議に直接参加しなかったことの影響は大きかった。のみならず、彼は福建事変に際し、一九路軍との軍事休

戰協定を締結した中共側代表を務めた関係で、一九路軍を敵視したコミンテルン首脳陣に、自分の行為について釈明する必要があった。それに対して、陳雲は六期五中全会選出の中央書記処書記として、議決権をもつ遵義會議の正式参加者であった。遵義會議を含めた「長征」の重要會議に関する詳しいメモを認め、密かにモスクワまで持参していた。一二月三日、スターリンが、中共と紅軍の現状を知るためにクレムリンに呼んだのも、潘漢年ではなく、陳雲であった。陳雲が紅軍の「長征」と遵義會議について報告した席には、中共コミンテルン代表団の王明と康生のほかに、ヴォロシロフ、モロトフ、オルジョニキーゼ、ミコヤンが同席した。⁹⁰

一〇月一五日、このメモをもとに、陳雲は一年以上にわたってモスクワとの連絡が途絶えていた中共と紅軍の現状を、コミンテルン執行委員会書記処緊急會議にて報告した。陳雲報告は、「コミンテルン執行委員会書記処會議（一九三五年一〇月一五日）史平同志の報告」（すでに紹介した「史平報告」に同じ）と題された。⁹¹ 報告に当たっては、「（乙）遵義政治局拡大会議」という「報告メモ」も参照した。

「史平報告」は、今では潘漢年の福建事変報告や陳潭秋の白区工作報告と同じ機密ファイルに収められている。この機密ファイルは、一九五七年一月にモスクワから返還された中共コミンテルン代表団アルヒーフの書類の一部である。「（乙）遵義政治局拡大会議」（「報告メモ」）も、ここから発見された。

機密ファイルの表紙には、緊急會議の司会を務めたトリアッティ（Palmiro Togliatti）による長文のメモが、注の形で残されている。これを、以下では「トリアッティ・メモ」と呼ぶ。トリアッティはコミンテルン第七回大会で、ピーク、ディミトロフ、マヌイルスキーと共に、開会報告を行った。そのテーマは、帝国主義戦争の危険に直面した共産党の責務に関するものであった。「トリアッティ・メモ」には、こうある。

会議記録は二回の校訂がなされた。第一回の主な校訂では、中国代表の発言を加筆修正し、「ファイル二」の中の、マヌイルスキーが徐傑（陳潭秋）報告後に行った発言を削除した。（中略）（РІАСІПІІ. 495/18/1012/151-152）

コミンテルン執行委員会書記処会議による校訂を経た速記記録は、一九三五年一〇月二二日、スターリン、ヴォロシロフ、モロトフ、カガノーヴィチに送付された。（РІАСІПІІ. 495/18/1012/1）

公開の刊行物に発表する報告を文章化するに当たり、施平（陳雲）の報告にはかなりの修正が加えられた。そこでは、軍事的誤りを犯した点に関する部分が大幅に圧縮され、経済政策（商人と富農に対する態度）の欠点に関する部分、羅邁（李維漢）の幹部政策の誤りに関する部分、中共中央政治局の黎平会議、遵義会議、会理会議に関する部分を完全に削除した。遵義会議について語った際、施平はこう述べている。「我々は政治局拡大会議を挙行したが、会議の出席者には、政治局員のほかに、軍事面の指導者、軍団長、政治委員がいた。この会議で、四川（省）に進軍する決定がなされた。その他、我々は会議において、蒋介石の第六回⁹²『包囲討伐』を防御する最後の段階と、西征の最初の段階における軍事指導の誤りをも修正した。／言うまでもないが、軍事指導ではこの時期、多くの誤りを犯してきた。今や、こうした誤りは徹底的に修正された。強固な指導の組織化が、これまでの指導に取って代わった。軍隊内の党の指導が強化された。我々は、『鉛筆によって指揮する戦略家』の職務を解任し、毛沢東を指導的地位に押し上げた。」（РІАСІПІІ. 495/18/1012/12）

報告の最後の部分の、中国ソヴェト革命が勝利を得ることを争い取るという箇所を削除し、日本帝国主義に対する勝利を最初に獲得せねばならないという説明を追加した。（РІАСІПІІ. 495/18/1013/104）

第二回の校訂を経た速記記録には、次のコメントがある。「チェック済み、再印刷後、『共産主義インターナシヨナ

ル』編集部に回すこと。王明、フレッド（マンフレード・シュテルン）（РАСПИ: 495/18/1013/65）

一九三五年一月一日、「ファイル三」：マヌイルスキーは刊行物に公開予定のチェック済み報告を、A・A・アンドレーエフに送付した。（РАСПИ: 17/120/204/80）三つの報告の中からは、次の一つだけを論文形式で発表した。施平「英雄的な西征」『共産国際』一九三六年第一・二期、四五～六八頁。またКоммунистический Интернационал, 1935, № 33-34, стр. 26-41. (РАСПИ: 495/18/1022/1)⁹³

この「トリアッティ・メモ」には遵義會議の謎を解く重要な情報が凝縮されている。

第一に、コミンテルン第七回大会の反ファシズム人民戦線の決議を受けて、陳雲の報告から、極左的なソヴェト運動に関する言及が削除された。

第二に、スターリンを始めとするソ連首脳陣の、毛沢東への高い評価を念頭に、毛沢東が中華ソヴェト共和国主席として推進した富農抑圧政策などを記録から抹消し、毛沢東の政治的威信を保つことに努めた。

第三に、「史平報告」を「英雄的な西征」という題名で『共産主義インターナショナル』に掲載するに当たり、多くの改正を施した。博古とブラウンの軍事的誤りに対する非難が削除された。羅明批判キャンペーンで鄧小平、毛沢覃、謝維俊、古柏ら毛沢東派を一斉摘発した羅邁（李維漢）の所業を不問に付したのも、毛沢東に不利な情報を隠すための措置だった。

第四に、最も注目すべきなのは、「長征」後の湘江戦役で紅軍が惨敗を喫した後に開かれた三つの重要会議、すなわち黎平會議（一九三四年十二月一日）、遵義會議（三五年一月一五～一七日）、會理會議（三五年五月一二日）に

対する取り扱いである。コミンテルンは、「長征」後の中共の政治変動をこの三つの会議が象徴するという陳雲の見解に完全に同意したうえで、三つの会議の機密情報が外部に漏れるのを防ごうとした。

「トリアッティ・メモ」には、遵義会議に関連して削除したフレーズだけが示されているが、改めて、「英雄的な西征」掲載時に消された、三つの会議に関する「史平報告」の記述を復元すれば、次のようになる。

黎平会議…黎平では、指導者内部で争いが起こり、その結果、我々は犯した過ちを修正することになった。我々は、これまでの「鉛筆によって指揮」する指導者に不信任を突きつけた。湖南・貴州境界で、敵が我々よりも四、五倍の兵力で堡壘を敷いて対峙したのは、我々が紅六軍団の前進経路に沿って進軍すると予測した結果である。広西軍は南側から我々の後衛部隊に突撃した。後ろには、もっと大きな部隊も追撃中であった。／これまでの指導者は直線前進の方針を貫き、今後このやり方で処理すべきだと考えた。我々は断固として反対し、そうした方針は敵を利用にすぎず、紅軍と中国革命に何ら好影響をもたらさないと指摘した。これまでの指導者は、そうした意見を述べる人々を軍事法廷に送ろうとした。我々の答えはこうである。法廷で審判すべきなのは、これら指導者であって、我々ではない。(JDYL 12: 352-353)

遵義会議…第二段階の西征で得た第四の勝利は、遵義で拡大政治局会議を挙行了ことである。会議に出席したのは、政治局員の他に、軍事面の指導者全員と、軍団長、政治委員がいた。／この政治局会議は、四川への進軍を決定した。そのほか、我々は会議において、第六回「包圍討伐」に反対する最後の段階と、西征の第一段階での軍事指導の誤りをも修正した。言うまでもないが、軍事指導者はこの時期、一連の誤りを犯してきた。今や、こうした誤りは

徹底的に修正された。強固な指導グループを確立して、これまでの指導者と入れ替えた。党の軍隊に対する指導が強化された。我々は、「鉛筆によって指揮する戦略家」を更迭し、毛沢東を指導の責任者に選んだ。(JDYL 12: 354)

会理會議…会理城で我々は五日間休み、政治局は會議を召集した。この會議は紅軍の指導が正確であることを総括し、かつ肯定した。會議は、新しい指導グループの指揮が秩序立っていると指摘した。政治局の決議は多数の紅軍戦士に伝達され、幅広い支持を得た。(JDYL 12: 361)⁹⁴

すでに述べたが、陳雲は一〇月一五日のコミンテルン執行委員会書記処緊急會議での報告の際、「(乙) 遵義政治局擴大會議」と題されたメモ(「報告メモ」)を参照していた。「トリアッティ・メモ」が、黎平會議、遵義會議、会理會議の三つを、紅軍の西征後に開かれた最も重要な會議として取り上げるのは、陳雲の「史平報告」の見解に沿ったものである。陳雲は、この三つの會議の重要性をコミンテルン執行委員会の幹部に説くに当たって、手元に自分用のメモを用意した。そのメモの一部が、「(乙) 遵義政治局擴大會議」であったと考えられる。メモには、甲、乙、丙という通し番号が振られていた。「トリアッティ・メモ」の上記の文面から推せば、それらの構成は、次のようなものであったに違いない。

(甲) 黎平政治局會議

(乙) 遵義政治局擴大會議

(丙) 会理政治局擴大會議

一九五七年一月にモスクワから返還された中共コミンテルン代表団アルヒーフの書類の中には、陳雲の書いたメモのうち、(甲)、(丙)に当たる部分も残っているはずだ。中共側は、この一連のメモから「(乙) 遵義政治局拡大会議」だけを切り取って公表したのである。「(甲) 黎平政治局会議」と「(丙) 会理政治局拡大会議」には、毛沢東の権力と権威の保持を至上命題とする中共にとって、よほど都合の悪い情報が記されていたのであろう。それを突き止めることが、我々の次の課題になる。

九 黎平会議は特務政治を解き放った

黎平会議について述べた最後で、陳雲は、ブラウンが反对者を軍事法廷に掛けると脅迫したと書く。これは事実に戻す。この時期、ブラウンはマラリア熱を発し、黎平会議を欠席した。彼は、自分の軍事戦略の概略を周恩来に語り、会議参加者に伝えるよう頼んでいた。だが、ブラウンが紅軍幹部を軍事法廷に送ろうとした事実は、確かに存在する。それは一九三四年二月一日の鐘山戦役でのことである。鐘山は広西壮族自治区の賀州市に位置した。伍修権は回想録でこう述べている。

当時、二つの部隊があった。一つは周昆が軍団長を務める紅八軍団で、もう一つは周子昆が師長を務める三四師（紅五軍団に所属〔これは伍修権の記憶の誤り。周子昆は当時、紅九軍団二師の師長―引用者注〕）であり、いずれの部隊もその大多数は、紅軍に新たに編入された地方の赤衛隊や農民で、訓練や実戦経験を欠き、進軍の苦戦が続く

なかで、部隊のほとんどが壊滅の憂き目に遭った。遵義に着く前、部隊がある場所に駐屯したころ、まだ実権を握っていたブラウンが、三四師師長の周子昆を呼んで、彼を厳しく叱りつけ、おまえの率いる兵士は成っていない、おまえも部隊を全部ダメにしながら、自分の妻だけは傍から離さないではないか、と訓戒を垂れた。事実はどうかといえば、周子昆の妻の曾玉同志は、紅軍が長征に赴くに当たって、ソヴェト区に残留の予定だったのが、残留を望まず、部隊と一緒に命懸けで行動したいと志願したので、夫の世話をほとんど受けられず、大変な苦勞を嘗めていたのである。ところがブラウンは、彼女の夫たる周子昆を厳しく叱責したばかりか、彼を拘禁するよう警衛營に命じ、軍事法廷に送って裁判に掛けようとしたのだ。だが、警衛營の同志たちは動かず、ブラウンは大いに困った。博古と毛沢東同志がちょうどその場にいた。博古は見えて見ぬ振りをしたが、毛沢東同志が表に出て調停を試み、周子昆の処理は自分に任せてほしいと言ったので、ブラウンはしぶしぶこの件から手を引いたのである。⁹⁵

毛沢東が「総括決議」で弾劾に及んだ、ブラウンの悪質な「懲罰主義」(DYL 12:63)の実例が、これであった。しかし、これよりもさらに過酷な懲罰が、ブラウンではなく、周恩来によってなされたことを伍修権は黙して語らない。毛沢東の同郷人、蕭勁光は一九三三年一月、一九路軍との共同作戦を策定する中で、重大な戦略ミスを行ったことがあった。その責任を追及し、彼の職務を解いたのが周恩来である。中革軍委副主席の王稼祥も「蕭勁光の本位主義に反対する」という弾劾文を書いている。(BYM: 64) ブラウンによる周子昆の処罰は、これに比べればずっと軽微なものだった。その蕭勁光が、鐘山戦役で、またしても戦略ミスを犯した。国軍の攻撃の前に、配下の部隊を見捨てて逃走したのである。ブラウンは蕭を軍法會議に掛けようとしたが、毛沢東の取りなしで、後方勤務に回される

だけで事なきを得た。(ACAC:19)

だが伍修権の回想が重要なのは、毛沢東が、遵義会議前より中央の警衛宮に隠然たる影響力を持ち、ブラウンや博古の介入を許さなかった事実を明るみに出したことだ。警衛宮の前身は一九二八年五月に井岡山で作られた紅四軍特務連で、この後、特務大隊、政治保衛大隊、総前敵委員会特務營、独立特務團一營、中央軍事委員会警衛宮と組織変えし、一九四二年に中央警衛団となった。中共史上、名高い汪東興率いる八三四一部隊は、この中央警衛団の別称にほかならない。現在の中央警衛局は中共中央弁公室に属する。

秦福銓は、父の秦邦礼からの伝聞として、遵義会議の直前に、毛沢東、朱徳、周恩来が、警衛宮の人員を自己の腹心に交代させて、遵義会議の奪権に備えた経緯を書き留めている。

「三人団」を護衛する警衛宮は、去年（一九三四年）九月に項英が国家保安局から厳選した幹部が元で、その忠誠心には太鼓判が押せた。それが如何なる理由かは分からぬが、政治局会議開催の直前になって、周恩来が紅九軍団二〇師の人員を異動して警衛を担当させ（その幹部や兵士の大部分は、毛沢東が井岡山上ったとき連れて行った湖南東部出身の派閥だった）、元の警衛宮（彼らは装備に優れた）を他に回したのだが、第一線の部隊を強化するというのは口実にすぎず、武力で威嚇し、目標を実現できねば武装蜂起するということの表れであった。(BYM:123)

この措置に疑いをもった博古は、総書記を警護する警衛宮の交代をなぜ自分に無断で行ったかを、二月五日の午後、周恩来に質した。周はこう弁明した。

正月が過ぎたころ、中央が湘江戦役の失敗をもたらした主犯を連行しそうだという噂が広まったとき、これは警衛営から流れたデマではないかと疑った。そのとき、朱徳が私に、次のように言ったのだ。紅八軍団を解散して、新兵を九軍団に補充したが、九軍団には戦場での経験のない連や排の幹部が少なからずいる。中央警衛営は、項英が元の保衛局を解散したとき、その中から戦闘経験の豊富な者を厳選して作られたというし、現場で兵士を勤めた同志ばかりのチームもあるようだから、彼らを紅九軍団に異動させて、新しいポストでその実力を発揮させ、政府の警衛団の方には元紅九軍団の者を当てては、どうだろうか。今の警衛営は欠員がかなり多い。強化された営を整備して、中央と中革軍委の警衛任務を負わせ、整備後に余った幹部は紅九軍団に回せば良い。私はあのデマのことを考えて、この朱徳の意見にさっそく同意し、明日から実施することに決めた。(BYM: 130-131)

中央が策定した湘江戦役の攻撃命令に抵抗したのは、毛沢東、洛甫、王稼祥の「トロイカ」であった。これが、周恩来の語る「湘江戦役の失敗をもたらした主犯」である。だが、周恩来は「トロイカ」を守ろうとした。朱徳もまた、国家保衛局と政治保衛局に属する警衛営を、毛沢東の派閥から成る紅九軍団で固めようとした。朱徳、周恩来、毛沢東の事前工作によって、総書記博古やコミンテルン軍事顧問ブラウンは特務の権力を奪われたのである。実際、二つの野戦縦隊を合併し、劉伯承を総司令、陳雲を政治委員、葉劍英を副司令に任命した黎平會議の野戦軍改編は、「ブラウンの軍事指揮権を取り消すもの」⁹⁶に等しかった。遵義會議は、中央の軍事・政治路線をめぐって、二つの陣営が対等な立場で話し合う協議の場ではなく、特務を使った最高権力篡奪というクーデターの様相を帯びることになる。このクーデターの成功の鍵を握るのが、秦福銓の書く「紅九軍団二〇師」にはかならない。ただし、秦福銓が

「二〇師」と書くのは、正しくは「二二師」とすべきである。

紅九軍団は一九三三年一〇月二八日に編成された。趙鎔「紅九軍団の貴州・雲南・四川での戦闘過程」は、こう書いている。「中央ソヴェト区の時代に、紅軍総政治委員の周恩来同志は、我が紅九軍団を『戰略騎兵』と称賛した。あのころ、紅九軍団軍団長は羅炳輝同志で、政治委員は何長工同志、參謀長は郭天民同志で、政治部主任は黃火青同志だった。私は当時、供給部長を担当した。」⁹⁷

紅九軍団は、一九三四年一〇月一日からは、紅一軍団と共に、「長征」の先頭部隊として零都を出発した。このとき、上海臨時中央局の項英は、凱豐と王首道を紅九軍団に派遣して、參謀長の張翼の投降で動揺する軍団の綱紀引き締めを図った。紅九軍団の二四師を紅一軍団直屬部隊に異動させ、代わりに中央警衛營に属する一団と、広東・江西の武装組織の四〇〇〇人で二二師を創設し、紅九軍団に所屬させた。しかし広西・湖南境界の竜虎関の戦いで、紅九軍団は紅八軍団と共に壊滅的な打撃を受けた。十一月一七日一八時、中革軍委は紅八軍団と紅九軍団に改編命令を發し、紅九軍団二二師の中の二つの營が、まず紅九軍団三師に編入された（「中革軍委の紅八、九軍団などの改編に関する命令」(IDYL 11: 624)）。この改編作業が完了し、紅九軍団二二師が紅九軍団三師へと生まれ変わるのは、黎平會議後であった。

中革軍委の改編計画によって、このとき紅九軍団三師に編入された幹部は、周子昆（師長）、黃開湘（政治委員）、劉道生（政治部主任）である。(ZZSZL 3: 2310)

周子昆（一九〇一〜四一）は、広西の生まれだが、一九二七年に南昌蜂起に参加し、朱德、陳毅と共に湖南・広東を転戦した後、井岡山に上った。伍修権の回想がブラウンの「懲罰主義」の犠牲者として描いたこの人物は、毛沢東

親衛隊の隊長であつた。(JDYL 11: 626)

黄開湘（一九〇一—三五）は江西の出身。一九二六年に方志敏の指導で農民運動に従事し、中華ソヴェト共和国が出来てからは、紅第一〇軍を組織し、江西省の東北に根拠地を築いた。紅一軍団二師四団の政治委員、楊成武と共に、遵義會議の警衛に当たつたのは良く知られる。

楊成武の回想録「偉大な転換」は、黄開湘を「王開湘」と誤記する。⁹⁸ 遵義會議までの一週間、この黄開湘と共に、遵義の北にある松坎で警備の任に就いたと書いている。遵義會議の決議が出た日、楊は紅一軍団からの電報で、「毛沢東同志が政治局常務委員に選ばれ、周恩来副主席、朱德総司令などとともに紅軍を指導する」という遵義會議の決定を知り、「（紅一軍団二師）四団の松坎進駐が、四川の敵に対して警戒態勢を採って、この會議を援護した」ことに誇りを感じたと言う。⁹⁹ 松坎の警備が、北方の四川の国軍を監視するのは当然だが、それが同時に遵義會議を非常事態から守る目的をもっていたことを指摘したのである。

劉道生（一九一五—九五）は湖南茶陵県の人。一九二七年、毛沢東が率いる秋収蜂起に参加。「長征」後は第一野戦隊（第四梯隊）、中央縦隊の幹部団（正副団長は陳賡、宋任窮）に属した。

周子昆と黄開湘は、厳密に言えば、「毛沢東が井岡山に上ったとき連れて行つた湖南東部出身」ではないが、紅軍での軍歴は毛沢東親衛隊員の名に恥じない。遵義會議で、毛沢東の非難から博古を擁護した凱豊は、會議の直前の一九三四年一二月、この毛沢東親衛隊（紅九軍団）中央代表を追われていた。(ZYWY: 287)

紅九軍団二二師を受け入れた紅九軍団三師の、歴代の師団政治委員には、伍修権や劉英の名前がある。(ZZSL 3: 2297) 遵義會議でブラウンの通訳を務めた伍修権は、「戰略騎兵」の異名をもつ紅九軍団の元政治委員だった。劉英

もこの「戰略騎兵」の特務工作を長く担当した。劉英は毛沢東の紹介で、後に洛甫夫人となる。

王首道が紅九軍団で果たした役割も重要である。彼自身は紅九軍団に直接には所屬していない。だが、中央が紅九軍団に発した電報では、「羅炳輝、何長工、王首道、李井泉」と並称されるのが常で、彼が紅九軍団と密接な関係にあるのは周知の事実だった。¹⁰⁰ また、中央秘書処と中革军委機要科で機密電報を一括管理した周恩来夫人の鄧穎超は、遵義會議の前後に、肺結核を理由に、¹⁰¹ 秘書長の職位を鄧小平に、機要科長の職位を王首道に、それぞれ譲っている。鄧小平は羅明批判キャンペーンで打倒された毛沢東派であり、王首道も毛沢東が広州で開いた農民運動講習所の受講生、かつ井岡山の闘争以来の部下である。王首道が「総括決議」を初めて収録した『六大以来』の編集助手を務めたことは、すでに書いた。

「毛沢東親衛隊」（紅九軍団二二師）と並ぶ特務集団、中央警衛営は、「長征」の当初、中共中央と共に第二野戦隊第四梯隊に属したが、黎平會議が戦闘の機動力を高めるために、二つの野戦隊を中央縦隊に再編することを決めてから、第一梯隊の指揮下にはいった。その責任者は鄧発と蔡樹藩である。（ZZSZL 3: 2301）蔡樹藩の異動前の職位は、紅九軍団三師の政治委員（ZYWY: 22）だから、「中央政府の警衛団には元紅九軍団の者を当て」という朱徳の考えは、蔡樹藩の人事にも反映されていると言えよう。

中央警衛営の幹部は、鄧発がその典型だが、周恩来の創設した中央特科の人脈から来ている。鄧発の部下だった張耀祠は、遵義會議の直前の一月一二日、特科の偵察科から国家保衛局特務隊の班長に任命され、遵義會議の警護に当たった。そして、この警護の重点任务が、追ひ詰められた博古の逃亡と自殺の防止だったという衝撃的な発言を残した。¹⁰² 毛の腹心、王首道が、遵義會議での周恩来の役割について、次のように書いているのも、意味深長である。「会

議の前、周総理は毛主席の指示と部署に従って、大量の事前工作をし、會議の開催に確固とした礎を築いた。」¹⁰³

遵義會議における「トロイカ」の奪権を、毛沢東親衛隊と周恩来特務隊によって防衛すること。黎平會議の野戦軍改編の目的はそこにあった。トリアッティは、この最も重要な権力の機微を、人々の目から隠すことを選んだ。

一〇 會理會議の真相

一九三五年五月九日、紅五軍団三七団の渡河をもって、紅軍は金沙江戦役を終え、紅三軍団と幹部団は、雲南省の會理の包圍作戦を開始した。一二日、朱德総司令は、紅一、三、五、九軍団および中革军委縦隊の首領に、一五日まで、會理とその周辺で部隊の休息と補充を行うことを通電した。次いで、林彪、聶榮臻、彭德懷、楊尚昆に次の電報を打った。「党中央は、本日一二日、政治局拡大会議を開く。彭德懷、楊尚昆、劉少奇の三人および林彪、聶榮臻は、本日午後一四時に鉄廠に参集されまし。」¹⁰⁴

陳雲の「史平報告」の削除部分は、こう書いていた。「會議は、新しい指導グループの指揮が秩序立っていると指摘した。」だが、會理會議についての最も詳細な記録である楊尚昆の回想録は、「新しい指導グループの指揮は秩序立っている」という陳雲の記載とはかけ離れた、會議参加者の激烈な論戦の有様を活写している。

この會議の真相に近づくには、遵義會議以後に毛沢東が指揮した一九三五年一月二八日の土城戦役、三月一五日の魯班場戦役をあらかじめ理解しておかねばならない。いずれも、紅軍の惨敗に終わった。土城戦役の戦死者はほぼ二〇〇〇名、紅三、五軍団の損傷が特に著しかった。魯班場戦役の犠牲は、紅一軍団に限っても、死者四八九人、負傷

者は一〇〇〇名を越えた。¹⁰⁵

土城戦役の惨敗は、初めて前線の指揮を採った毛沢東の軍事指導力に対する深い疑念を生んだ。博古は「狹隘な経験論者の指揮ではうまく行かないようだ」という嘲笑の言葉を残した。¹⁰⁶

多数の死傷者を出した紅三、五軍団では、際限なき遊撃戦に対する反発から、下級兵士の間に不穏な動きが生まれた。そこで、劉少奇を紅三軍団へ、陳雲を紅五軍団へ、それぞれ党代表として派遣し、改めて「遵義会議の精神を傳達」することが決まった。二月八日、劉少奇は紅三軍団の団以上の幹部と政治工作幹部座談会を行った。¹⁰⁷ところが、現場の意見に共感した劉少奇は、事態の改善策を中央に進言する挙に出た。

劉少奇同志は、部隊から聴取した状況を総合し、自分の意見も加えて、電報を起草し、彭德懷総司令と私（楊尚昆）に署名の上、送付するよう手渡した。彭德懷総司令は、下級に意見があるのは、上級の戰略意図を理解できない場合がほとんどだから、思想教育を強めれば、すぐに解決できると考え、電報には署名しなかった。電報は、私と劉少奇の連名で出した。¹⁰⁸

しかし、それだけでは収まらなかった。紅三軍団四師の政治委員である黄克誠が、劉少奇に続いて、自分も報告を書くと言いつ出したのである。

黄克誠は、土城戦役において攻撃の最前線に立った。今回の戦闘はやるべきではなかった、初期の目的を達成できないばかりか、莫大な損傷を生んだという後悔の念を劉少奇に告げている。彼はその思いを手紙で中央に伝えたのだ。¹⁰⁹

さらに魯班場戦役の失敗が、中央と紅軍に鉛のように重くのしかかった。紅一軍団軍団長の林彪は、紅軍が一刻も早く四川省北部へと進駐して、張国燾の率いる紅第四方面軍と合流すべきであると、毛沢東に何度も進言した。魯班場での経験は、井岡山の闘争以来、毛沢東の崇拜者であったこの指揮官を、毛沢東弾劾へと向かわせた。我々は「回り道」をしている、このままでは、部隊を駄目にしてしまう、「まっすぐな道」を行くべきだ、と林彪は考えた。魯班場の戦いに勝ち目はないと信じ、中央に何度も翻意を訴えた。

林彪はついに、会理會議の直前、指揮官交代を諮る手紙を中央に書いた。会理會議が開かれたそもその理由は、この林彪書簡への対応を協議するためだった。

林彪と同じ紅一軍団に属する聶榮臻はもっぱら、林彪の告発に回った。林彪が電話で彭德懷に次のように話したと暴露した。今の指導では駄目だ、君が指揮を取れ。今のままでは失敗は間違いない。我々は君の指導に従う、君が命令を下せば、我々は付いて行くと。聶榮臻はこう述べてから、自分は林彪の考えに同調したことはないし、その手紙に署名もしなかったと語気を強めた。¹¹¹しかし、聶榮臻の発言は林彪の真意を正しく伝えていない。林彪は毛沢東を中革軍委から追放せよと言ったことはない。毛が前線の指揮を止めて、中革軍委の総部に戻り、紅軍全体の指揮に当たる方がずっと良いと進言したにすぎない。林彪が、毛沢東のみならず、朱徳の下野さえ要求したと『朱徳伝』が述べるのも、事実無根である。¹¹²

會議参加者は、林彪の電話に、どう対応したのかと彭德懷を詰問した。自分は林彪の提案をきっぱり退けたと彭は弁解した。前敵指導部を変更するのは適切ではなく、私をトップに据えるなど、もつてのほかだ。¹¹³しかし今度は、そのことを中央に報告せず、今まで黙っていたとは何事かと、皆に厳しく叱責された。¹¹⁴

会議参加者たちは、何かに追い立てられるかのように、司会を務める総書記の洛甫にも疑惑の目を向けた。洛甫もまた、劉少奇が訪れた紅三軍団を視察し、彭德懷や楊尚昆と行動を共にしたことがあった。三月一〇日に鴨溪で行われた中央政治局拡大会議で、打鼓新場の国軍（周渾元部隊）を攻撃すべきか否かをめぐって激論が交わされたところである。林彪も彭德懷も、打鼓新場で戦うべきだと主張した。毛沢東一人が、魯班場の方を攻撃すべきだと言ったが、少数意見として退けられた。だが、その夜、毛沢東は周恩来を説得し、自分の意見を通した。三月一日、洛甫は、打鼓新場の攻撃を中止するという中革军委の指令を携えて、苟垣で開かれた中革军委縦隊の幹部懇親会に出席した。¹¹⁵ 会議は、洛甫のこの間の行動を、林彪、彭德懷と示し合わせて事実を隠し、周恩来、毛沢東、王稼祥の軍事指導に反対する陰謀を企てたものと解釈したのである。

洛甫の問題には、もう一つの側面があった。上海臨時中央局を再起動し、コミンテルンとの関係を回復させるミッションに、羅邁も連れて、自分も参加したいと三月一〇日の中央政治局拡大会議で切り出したことである。（王明も一九七四年になって、回想録で、このことを話題にした。）しかし、全員がこの提案に猛反対し、毛沢東も懸命に翻意を求めたので、最後は折れた。毛沢東はこれを機に、洛甫に対する疑いを深めたのではないかと、楊尚昆は書いている。¹¹⁶

会議で、毛沢東は、劉少奇（当人は会議を欠席）、楊尚昆、黄克誠（当人は会議に不参加）、林彪、彭德懷、洛甫から出されたさまざまな形の抗議に直面したことになる。黄克誠を除いて、全員が遵義会議で自分の尊権の後押しをした者たちである。だが、これら腹心の抗議を、毛沢東は「右傾日和見主義」の表れと決め付け、一方的に押さえ込んだ。「新しい指導グループの指揮」は、「秩序立っている」どころではなかった。

洛甫が一九四三年に延安で書いた「整風筆記」には、以下の件がある。

会理會議は基本的には正確であつたが、他方で、当時の幹部に見られた離心傾向やある種の動揺した感情に対する闘争は必要であつた。けれども私見によれば、闘争の方法には行き過ぎた点があつた。これらの同志の誤りは、実際には個別の誤りにすぎず、適切な批評や説得によつて、誤りを正すことが可能で、日和見主義といったレッテルを貼つて彼らを威圧するには及ばなかつたからである。¹¹⁷

毛沢東が、六人の個々の誤りを、組織的な反対行動であるかのように弾劾したことへの、洛甫の深い嫌惡の念が行間に溢れている。ずっと後のことになるが、一九五九年の廬山會議で、彭德懷、洛甫、黄克誠（そして周小舟）が「彭德懷反党集団」の成員として肅清されたとき、林彪は、会理會議が議題とした自分の中央宛て書簡に、彭德懷が関与したことはないと断言した。¹¹⁸

トリアッティーが、会理會議の顛末を、陳雲の「英雄的な西征」から消し去るに至つた気持ちを、我々は今や十分に理解できるであらう。

一 「中国共産党の敵の第五回『包囲討伐』に反対する中での錯誤の問題」

一九三九年夏の終わり、ある日曜日の夜明け前、オットー・ブラウンは、総書記の洛甫から、「至急、延安飛行場に急行されたし。貴兄は急遽、モスクワに戻って良いことになった」という知らせを受け取った。六年振りのコミンテルンへの帰還に、ブラウンの心は踊った。(ACAC: 264) 八月二七日のことである。¹¹⁹⁾

蘭州行きの飛行機には、意外なことに、中共幹部の先客がいた。周恩来、鄧穎超の夫妻、王稼祥、陳昌浩たちである。周恩来は七月一〇日、中央党校での報告の帰途、落馬して骨折した右肘の回復が思わしくなく、ソ連まで治療に赴くとのこと。蘭州では、遵義会議でブラウンの通訳に当たり、今は八路军甘肅弁事処処長を務める伍修権の接待を受けた。一行は、新疆の迪化(今のウルムチ)にも立ち寄り、中共新疆駐在代表の鄧発と陳潭秋から、新疆工作の報告を聞き、政府主席の盛世才と抗日合作について協議した。アルマータ、タシケントを経由し、一行がモスクワに着いたのは、ドイツのポーランド侵攻で第二次世界大戦が勃発した直後の九月中旬だった。¹²⁰⁾

モスクワに着くとすぐ、ブラウンは、コミンテルン監察委員会への出頭を命じられた。博古、周恩来と共に、第五回「包囲討伐」に反対する戦争を指導してから、遵義会議で「三人団」の軍職を解かれるまでの時期、特に福建事変で軍事指導を誤った原因について、何度も質問された。驚いたことに、この監察委員会には、九月一九日に右肘の手術を終えたばかりの周恩来が、ブラウンの言葉を借りれば、「主席検察官」(ACAC: 265)として現れた。ブラウンは知る由もなかったが、コミンテルンが、彼をモスクワに召喚して、第五回「包囲討伐」反対戦争期の彼の功罪を審議することを決めたのは、この年の八月一九日のことだった。コミンテルン内に組織した中国問題研究小組が、ディ

ミトロフ執行委員長宛てに提出した書面報告にはこう書かれている。

中共第七回全国代表大会でオットー・ブラウンの工作問題が議論されるのは確実だが、今に至るまで、彼はコミンテルン執行委員会の代表であると思われる。毛沢民（毛沢東の実弟）同志が、私との談話ではつきり述べたように、一九三二年から三五年まで、ブラウンがコミンテルン執行委員会の代表であると人々が信じたために、彼は博古と共に、あのような路線を実行して、多くの党幹部や三分の二に及ぶ紅軍の主力部隊を壊滅させるに至った。コミンテルンに対する敬意の故に、ブラウンと博古は懲罰を免れたのだと毛沢民は考えている。／第七回全国代表大会を開く前に、ブラウン問題を専門に調査し、一定の結論を出す必要がある。¹²²

中国問題研究小組の母体は、一九三九年五月二三日に成立したコミンテルン内の諮問組織、中共中央文献資料研究小組である。七月五日、デイミトロフの意向によって中国問題研究小組へと改組された。ソ中から一三名が参加したが、その中心的役割を担ったのは林彪である。林彪は三八年一月末、病氣治療という名目で、モスクワに派遣された。実際は、一月五日に閉幕した六期六中全会の決議内容を、コミンテルン執行委員長デイミトロフに報告するよう、毛沢東の密命を受けていた。彼はモスクワ到着後、中共コミンテルン代表団の団長である任弼時と共に、三八年になってから頓に陰悪化した国共関係を改善するための方策を、ソ連やコミンテルンと協議中であった。¹²³

一九三九年二月二六日、ブラウンを審査するコミンテルン監察委員会に、林彪は書面報告を提出した。その中で彼は、三三年冬と三四年三月に、第五回「包囲討伐」に反対する戦争への対処方法を、ブラウンと協議したことがあ

ると証言している。遵義会議での毛沢東発言を忠実に再現しながら、林彪は、ブラウンの「単純防御」戦略が紅軍にもたらした悪影響を強調した。しかし、この書面報告で最も注目されるのは、林彪がブラウン問題に関連して、羅邁と鄧発を名指しで告発したことである。

ブラウンの事件に対して、真つ先に責任を負うべきなのは博古である。彼は党の総書記の地位にありながら、ブラウンを放任し、多くの場面で彼を擁護し、彼に「威信」や「地位」を与えてきたからである。博古の次にブラウン事件に責任を負うべきなのは、羅邁と方林（鄧発）である。この時期の全てにわたり、ブラウンの誤った路線を実行し、それをさらに発展させた点において、二人はブラウンの共同謀議者である。¹²⁴

この林彪書面報告は、ブラウン問題の審議に微妙な影を投げかけた。彼による羅邁と鄧発の告発、特に鄧発に対する非難は、ブラウンを厳罰に処すという当初の方針の妨げになる可能性を秘めていた。すでに触れたが、中共のジェルジンスキーの異名をもつ鄧発は、周恩来が創設した中央特科の古参幹部である。「长征」の間、第二野戦縦隊、そして中央縦隊の司令員として、国家政治保衛局を一手に指導した。遵義会議で追いつめられた博古が自殺に走るのを防ぐよう監視体制を敷いたのは彼である。周恩来が、この子飼いの特務に毛沢東の奪権を援助するよう指示したことが背景にある。だが、奪権成功後、毛沢東は鄧発を特務工作の中樞から排除し始めた。中共コミンテルン代表団の団員、次いで新疆省の中共代表に任命して、延安に帰還させることがなかった。そして、国家政治保衛局の責任者には、湖南農民運動講習所時代からの腹心、王首道を据えたのである。

林彪の鄧発告発は、だから、鄧の上司である周恩来に対する間接的な批判を意味する。(周恩来への警戒を怠らなかった毛沢東が、林彪に周恩来を牽制するよう指示したのかもしれない。) 当の周恩来は、表向きは右肘の治療という触れ込みだが、実は、コミンテルン監察委員会でブラウンを弾劾するために、一九三九年九月からモスクワへと乗り込んできたのである。林彪の鄧発告発は、この「主席検査官」の調査と真つ向からぶつかった。

一九三九年二月二九日、コミンテルン監査委員会は、オットー・ブラウンの問題を議論する会議を開いた。中共側からは周恩来、任弼時のほかに、毛沢民(元中華ソヴェト共和国国家銀行長)、劉亜楼(元紅一軍団第二師師長)、楊至成(元紅軍総供給部部長)が参加した。林彪は欠席した。

この会議に提出された関係資料のうち、今見ることができるのは、毛沢民の書面報告(八月二六日)、ブラウンの福建事変に関する調査材料(九月二一日)、および同書面報告(九月二三日)である。

毛沢民が書面報告でブラウンを論評した件は、陳雲の「史平報告」や「(乙)遵義政治局拡大会議」(報告メモ)の範囲を出ない。だが書面報告は、当面の話題とは関係の少ない羅邁批判に、かなりの紙幅を割いている。

私が以上述べた材料は断片的なものにすぎない。これらの材料は、彼ら(ブラウン、博古)の罪状の一部を暴いただけである。彼らの罪状には、もっと多くの重要な材料があるだろうが、私は知らないのだ。例えば、遵義會議のような重要會議の決議は、羅邁派閥主義の偏見によって、まるで知るところがない。遵義會議が開かれたころ、私は羅邁によって一五隊政治委員の職務を剥奪されていたので、積極分子や幹部と看做されなかった。それを理由に、羅邁は、私をこの會議から締め出した。後で、私は抗議をしたが、羅邁は大いに怒り、報復措置として、「長征」の間、

私から馬を奪った。私を「長征」で過労死させようとしたのである。陳雲同志と周恩来同志に相談して、ようやく総務の仕事宛ってもらった。瘡に罹患したことも考慮に入れ、二人は馬を返してくれた。こうして、私は死を免れたのである。だが、遵義会議の決議は配布してもらえなかった。毛沢東同志は、余計な攻撃の材料を人に与えないよう、弟の私にさえ、党の多くの重要な文献を見せなかったし、党内闘争について語ることもなかった。だから、私の知るのは上述のことに限られる¹⁸⁵。

毛沢民は中央委員ではないが、中華ソヴェト共和国の財政部門の責任者を務めたことがあり、その地位は決して低くない。しかし、その彼にして、遵義会議に関する情報、羅邁の妨害もあって、これまで全くと言って良いほど開示されてこなかった。ブラウンの罪状を徹底的に批判するには、自分の材料だけでは不十分であることを毛沢民は良く自覚していた。これ一つをもつてしても、ブラウン弾劾が所期の目的を遂げることは難しかった。本稿の問題関心から重要なのは、遵義会議の「総括決議」が、一九三九年になっても、黨員には全く公開されていなかったことが、毛沢民の発言によって明るみに出たことだろう。

ブラウンの福建事変に関する書面報告の眼目は、次のフレーズにある。

福建事変における私の誤りの多くは、逡巡遅延と優柔不断に尽きると考える。中共中央と上海臨時中央局の政治評価は異なっており、軍事方面では二つの相容れない計画があった。一つはフレード（マンフレート・シュテルン）によって出されたもので、紅軍の軍事規律を強化し、紅軍の主力が贛江を越えて蒋介石軍の大後方である南昌に向かっ

て長距離進撃を行うよう命じるもの。もう一つは、中革軍委の賛同を得、私自身も正しいと考えた、部隊を出動させて福建北部の一九路軍を援助するよう命じるものであった。ところが、この計画は実行されず、優柔不断と逡巡遅延を繰り返すうちに、部隊が福建中部に派遣されてしまったのである。¹³⁶

ブラウンは、エーヴェルトが『中国論壇 (China Forum)』に「反日反蔣の初歩協定」をリークした大事件には触れていない。むしろ、軍事問題の責任者ではないエーヴェルトは、福建事変における戦略ミスの責任から免罪されて良いという口吻であった。しかし、シュテルンとの意見の相違によって、一九路軍との共闘の機会を逸した自分の過ちを率直に認める点で、敗戦責任の全てを一方的に博古に押し付けた毛沢東より、はるかに公正な立場を堅持している。

コミンテルン監査委員会会議での周恩來の発言資料は公表されていない。しかし、ブラウンの証言によれば、周恩來が会議に持ち出したのは、「一九三四年初頭の一九路軍反乱時の私（ブラウン）の行動」と「蔣介石の第五回戦争での『短距離突撃』戦術」の二つであった。ブラウンの「受動的防御」戦略を非難するとき、周恩來は特に慎重に言葉を選んだ。「受動的防御」を最も積極的に支持したのが、周恩來その人であったからだ。(ACAC: 263) このことは、遵義會議の「総括決議」からも確認できる。「×××同志は過去に『全線にわたって出撃せよ』というスローガンを提出したが、第五回の戦争では、全線で防御せよに変えた。戦略的に見て、両者はいずれも誤りである」という件の「×××同志」は周恩來を指していた。結局、周恩來のブラウン弾劾は、ブラウンの事実に基づいた反論を前に説得力をもつことがなかった。

一九四〇年一月二〇日、コミンテルン監察委員会は、ブラウン問題を検討する最後の会議を開き、ブラウンに対して、「誤りはあったが、処分は免除する」という最終判決を下した。「ブラウンの誤りは、中国情勢に対する理解不足から不適切な判断をした点にあるが、中共業務に対する決定権が彼にはなかった。」¹²⁸ 林彪の鄧発告発は、鄧の上司である周恩来の氣勢を削ぎ、ブラウン弾劾の現場で周を守勢の立場に置いた。さらに、遵義会議決議が黨員には非開示のままだったという毛沢民の証言も、ブラウン問題に関する証拠不十分という心証を、コミンテルン監察委員会に与えたのであろう。

林彪は、一九三九年一月二九日のコミンテルン監査委員会に出席しなかった。しかし、ブラウン処分の結論が出るより早く、彼は、中国問題研究小組の成員である劉亜楼と、コミンテルン監査委員会で証言した毛沢民を誘い、三人の連名で、「中国共産党の敵の第五回『包囲討伐』」に反対する中での錯誤の問題」という報告書を、一月八日、コミンテルンに提出した。林彪の評伝を書いた舒雲によれば、この報告はРГАСПИ（ロシア国家社会政治史史料館）に所蔵され、三〇〇〇字の分量のものだと言う。残念なことに、舒雲はこの史料の文書番号を記していない。¹²⁹ しかし、文書の規模からして、一四条・一万五〇〇〇字の「総括決議」ではなく、一条・二〇〇〇字余りの「教訓決議」を踏襲、敷衍した内容であろうことは想像がつく。

林彪たちの報告書は、遵義会議の決議が、まず一九三六年に鄧発によって、次いで三九年末に劉亜楼によってモスクワに届けられたと書く。¹³⁰ その後で、報告書は、次のような疑義を発している。遵義会議の決議案が三年もの長い間、コミンテルン主席団に手渡されなかったのは、いかなる理由によるのかと。¹³¹ 「三年」とは、一九三六年から三九年を指すから、モスクワに持参した遵義会議の決議を、鄧発がコミンテルン執行委員会の手許まで届けなかったこと

が、暗に非難されているのである。

鄧発がモスクワに持参した決議の本身は、その原本がコミンテルンに届かなかった以上、確かめる術はない。だが、劉亜楼が一九三九年末にモスクワに持参した決議の方は、彼も執筆者の一人である「中国共産党の敵の第五回『包囲討伐』」に反対する中での錯誤の問題」を念頭に置けば分かる通り、「教訓決議」であって、「総括決議」ではない。劉亜楼をモスクワに送り込むに際し、毛沢東は、『実践論』、『矛盾論』、『戦略問題』を「(教訓)決議」とともに、デIMITロフに届けるよう、劉に指示していた¹³²。

ブラウンは、コミンテルン監察委員会での中共側の攻撃について、「周恩来と毛沢民は、私をモスクワの党から『人民の敵』として追放し、できれば肅清するよう、毛沢東より命じられた」のだと供述する。(ACAC: 263) 二人はその目的を果たすために、それまで誰も知ることのなかった遵義會議「決議」を初めてコミンテルン監察委員会に提出したが、その試みは結局成功しなかったとも書く。ブラウンは、彼の回想録の第三章からも窺えるように、この「決議」を一九四八年の晋冀豫魯中央局版『毛沢東選集』二巻本で公開された「総括決議」だと信じ込んでいた。(ACAC: 106) しかし、彼は間違っていた。劉亜楼が延安から持参した「決議」は「教訓決議」の方であった。

もっとも、「教訓決議」を得たことで、モスクワの中国革命への対処の仕方が劇的に変わったわけではない。一九三四年一月に寧都會議で紅軍内の全軍事指導権を剥奪され、六期五中全会の中央委員会名簿から博古が氏名抹消済みであった毛沢東を、中央委員に復帰させよという厳命を下したのはコミンテルンにはかならない。¹³³ 爾来、毛沢東を中国革命の最高指導者とする方針は、モスクワにおいては揺るぎなきものであった。

一二 「総括決議」の誕生

「教訓決議」が一九三九年二月にモスクワに無事届けられた後、四〇年二月四日の政治局会議で、毛沢東は、遵義会議が軍事上の誤りだけを問題とし、路線上の誤りを取り上げることがなかった点は「修正すべきだ」と発言した。四一年六月二日に独ソ戦が始まり、コミンテルンとソ連の中共への圧力が弱まると、毛沢東の姿勢はさらに先鋭化した。四一年十二月、『六大以来』は「総括決議」を全文公表した。

「総括決議」の最初のテキストは、一九三五年一月八日に完成し、遵義会議初日に、張聞天が博古の政治報告を攻撃するために用いた「毛張王レジュメ」である。毛沢東は、この「毛張王レジュメ」をもとに、三六年一〇月から紅軍大学一科（上幹隊）で「中国革命戦争の戦略問題」の連続講義を行った。「毛張王レジュメ」は、自身の遊撃戦論の正しさを証明する具体例として引証された。三六年六月一六日に、モスクワとの無線電信機を独占してからは、コミンテルン機密文書をそこに加筆し、モスクワの権威による箔付を行った。

ブラウンは、「毛張王レジュメ」が「総括決議」へと加工されてゆく過程を、次のように的確に要約している。

「総括決議」は、実際は、毛沢東の演説（「毛張王レジュメ」——引用者注）を後から修正したもので、毛沢東はこれをまた一九三六年と三七年に紅軍の軍事講義の土台に使い、さらにその後の著作、特に『中国革命戦争の戦略問題』の土台に使ったのである。（ACAC: 106）

ブラウンの分析に追加したいのは、次の三つである。第一に、毛沢東はこの決議の日付を取って一月八日とした。「毛張王レジュメ」は一月八日に完成されていた。毛は遵義會議の開催日を忘れたのではないし、それを取り違えたのでもなかった。「毛張王レジュメ」をもって、新しい時代が始まる。最高指導部奪権に向けた毛沢東の昂然たる宣戦布告であった。第二に、博古指導部の白区政策を初めて公に非難した。遵義會議二日目に、白区工作の責任者であった劉少奇が、中央の極左政策を批判したとき、毛沢東、張聞天、王稼祥の「トロイカ」は、コミンテルンに批判の矛先が向くのを恐れて、劉少奇の発言を正面から取り上げなかった。しかし、一九三七年六月、劉が二つの書簡を公表して、洛甫に論争を仕掛け、六期四中全会以来の党の路線の批判に踏み切ると、三八年の六中全会で、毛もまた政治報告「新段階を論ず」を発表し、コミンテルンの權威に挑戦し始めた。「総括決議」は、こうした六中全会以後の情勢を受けて、コミンテルン路線の忠実な実行者である博古たちの白区工作批判へと舵を切った。第三に、博古指導部弾劾のトーンを最大級のものにするため、古田會議決議（一九二九年十二月）以来、お馴染みの「右傾日和見主義」批判の文言を付け加えた。

ブラウンのまとめは、一九七三年発表当時の議論としては出色のものだが、この極めて正鵠を得た意見は、改革開放後に、毛沢東思想の再編を試みた鄧小平集団によって歪められ、今見るような、陳雲のモスクワ報告を軸に、遵義會議を論じる態勢が整えられた。

鄧小平集団は、「中国共産党の敵の第五回『包圍討伐』」に反対する中での錯誤の問題」という報告書を書いて、遵義會議の決議の精神をモスクワに伝達した林彪の存在を排斥することに努めた。毛沢東の暗殺を企て、党の叛徒となった林彪から、毛沢東思想の確立者という役割を抹殺しようとした。毛沢東死後、遵義會議の生存者は、参加者一

九人中、陳雲、劉伯承、聶榮臻、楊尚昆、李卓然、伍修權の六人を残すのみとなった。遵義會議に関して林彪に匹敵する発言権をもつのは陳雲以外にない。だが、彼は遵義會議の採決で反対票を投じた、脛に傷もつ身である。この経歴を人々の目から隠し、彼の残した遵義會議文献こそ歴史の真相を明らかにする第一級史料であると人々に信じ込ませることが、党史研究のその後の課題となった。陳雲自身も、鄧小平、胡喬木と結託して、自分がモスクワに提出した「報告メモ」と「史平報告」を、それぞれ「遵義政治局拡大会議傳達提綱」(JDYL 12: 114-122)、「紅軍長征と遵義會議状況に関する報告」(JDYL 12: 347-377)と改称する¹³⁵ことを承認し、遵義會議の新しい物語を生み出すことに貢献した。

二〇二一年の建党百年を機に作成された、中共史上、三度目の歴史決議は、鄧小平の遺産との決別を重要なモチーフとしていた。¹³⁶ 遵義會議と「総括決議」にまつまるエピソードは、鄧小平理論の最も「弱い環」の一つである。遺産との決別の近道は、これを攻撃することだった。ところが意外にも、新しい歴史決議は、遵義會議で毛沢東の覇権が「事実上」確立されたと、ごく控えめに述べるに留めた。この事実は、習近平思想なるものが、毛沢東思想と鄧小平理論の危うい折衷の上に成り立っていることを示している。

略符号一覧

- ACAC Otto Braun, *A communist Agent in China (1932-1939)*, C. Hurst & Co., 1982. (原著は *Chinesische Aufzeichnungen (1932-1939)*, Dietz, 1973.)
- BYM 秦福銓『博古和毛沢東：及中華蘇維埃共和国の領袖們』大風出版社、二〇〇九年
- JDYL 10, 11, 12 中共中央文獻研究室、中央檔案館編『建党以來重要文獻選編（一九二一—一九四九）』第十冊、第十一冊、第十二冊、中央文獻出版社、二〇一一年
- KRZLS 18 中共中央党史研究室第一研究部編『聯共（布）、共產國際与抗日戰爭時期的中国共產党（1937-1943.5）』第一八卷（共產國際、聯共（布）与中国革命檔案資料叢書）中共党史出版社、二〇〇七年
- SWAYD 13, 14, 15 中共中央党史研究室第一研究部編『聯共（布）、共產國際与中国蘇維埃運動（1931-1937）』第一三卷、第一四卷、第一五卷（共產國際、聯共（布）与中国革命檔案資料叢書）中共党史出版社、二〇〇七年
- РГАСПИ Российский Государственный Архив Социально-политической Истории（ロシア国家社会政治史史料館）。文書引用は、例え「 Φ . 495, оп. 184, д. 47, л. 21-22）」は（495/184/47/21-22）と表記する
- ZYWY 中共中央組織部・中共中央党史研究室編『中国共產党歴届中央委員大辞典（1901-2003）』中共党史出版社、二〇〇四年
- ZZSZL 3 中共中央組織部、中共中央党史研究室、中央檔案館編『中国共產党組織史資料』第二卷 土地革命戰爭時期（1927.7-1937.7）下巻、中共党史出版社、二〇〇〇年

- 1 「中共中央關於党的百年奮闘重大成就和歷史經驗的決議」『人民日報』二〇二一年一月一七日。
- 2 胡喬木『胡喬木回憶毛沢東』人民出版社、一九九四年、一七八頁。
- 3 高華『紅太陽怎樣升起…延安整風的來竜去脈』香港中文大學出版社、二〇〇〇年、二〇三頁。
- 4 残る書記処書記の張国燾、王明（陳紹禹）、項英は、それぞれ西北革命軍事委員会主席、コミンテルン執行委員会委員・中共コミンテルン代表団団長、中共ソヴェト区中央分局書記の職務により欠席。
- 5 残る政治局委員の康生（張宗可）は、中共コミンテルン代表団団員の職務により欠席。
- 6 残る中央委員のうち、閻向応は紅二軍団副政治委員、任弼時は湘鄂川黔省委書記、瞿秋白は中共ソヴェト区中央分局宣伝部長、候補中央委員のうち、張浩（林育英）は中共コミンテルン代表団団員、陳潭秋は中共ソヴェト区中央分局委員兼組織部部长、羅邁（李維漢）は中革軍委第二野戦縦隊司令員兼政治委員の職務により欠席。また候補中央委員の李子芬は安慶第一監獄で服役中。
- 7 中共中央党史資料徵集委員会「關於遵義政治局擴大會議若干情況的調查報告」（一九八四年九月、中共中央党史資料征集委員会、中央檔案館編『遵義會議文獻』人民出版社、一九八五年、一二七頁）は、中共中央秘書長の鄧小平を遵義會議の正式参加者と書くが、ここでは採らない。彼は中央秘書長として議事録を書いたと言う。（楊尚昆『楊尚昆回憶錄』中央文獻出版社、二〇〇一年、一二〇頁）けれども、その議事録がどこからも見つからず、鄧小平自身、それに対する説明責任を全く果たしていないからだ。オットー・ブラウンは、遵義會議の出席者が「三五人から四〇人」であったが、これら出席者のうち、おそらく四分の三は「中央委員でも、いわんや政治局員でもなかった」と、回想録に書いている（ACAC:95）。鄧小平は、この「出席者」の一人にすぎない。文化大革命期に、遵義會議の内実を最も良く知る林彪は、鄧小平が遵義會議の正式参加者であることを否定し、遵義會議会址陳列室から鄧小平の写真を撤去した。それに対する鄧小平の反応は興味深い。彼はこう述べた。「私の生涯の歴史はすでに栄光あるものだ。遵義會議に参加したからと言って、この栄光に花を添えるわけでもなく、参加しなかったからと言って、この栄光を無きものにすることもできない。」（中共中央文獻研究室編、楊勝群主編『鄧小平伝（1904-1974）』上巻、中央文獻出版社、二〇一四年、二三三頁）彼は最後まで、遵義會議の正式参加者であることを正面から強く主張できなかったのである。なお、鄧小平のこのときの職位を総政治部機関紙『紅星報』編集長と書く回想録、研究書は多い。しかし、彼は一九三四年一〇月二〇日発行の『紅星報』第一期から編集長を務めた後、第七期を

出したところで、同ポストを陸定一に譲り、肺結核を患った鄧穎超より中央秘書長を引き継いだ。一九三五年二月一八日の黎平會議後になされた野戦軍改編で、第一野戦隊と第二野戦隊が中央縦隊に合併された後は、中央縦隊の秘書長に就任した。

8 瑞金からの西への大移動を「长征」と呼ぶのは後世の呼称で、当時の人々は、それを「西征」と名付けた。

9 ブラウンは「二日間の討議」と明言する。(ACAC: 104) それに対して会議参加者の伝記、回想録、年譜はどれも判で押したように、全て「一日一七日」の三日間の会議内容をまとめて記述するのみである。(例外は、李志英『博古伝』当代中国出版社、一九九四年と、秦福銓『博古和毛沢東…及中華蘇維埃共和国的領袖們』大風出版社、二〇〇九年のみ。)だが、二〇〇六年に出た『朱德年譜(1886-1976)』新編本、上冊は、一六日二四時に、遵義會議の決定を踏まえて朱德が発した新しい進軍・待機命令の電報を初めて公開した(中共中央文獻研究室編、吳殿堯主編『朱德年譜(1886-1976)』新編本、上冊、中央文獻出版社、二〇〇六年、四五一頁。後述)。この電報によつて遵義會議の討論が一六日に終了したことが、文獻的に初めて証明された。「二日間の討議」を受け、翌一七日の會議は人事問題の採決に充てられたと思われる。研究者の中では唯一、ロシアのアレクサンダー・パンツフが、「會議終了直後、参加を求められた指揮官や政治委員が現場に戻った後で、政治局委員だけの組織會議が開かれた」と明確に述べている。【俄】亜歷山大・潘佐夫著、卿文輝他訳『毛沢東伝』上冊、中国人民大学出版社、二〇一五年、三七〇頁(原著はАлександр Валентинович Панцов, Мао Цзэ-дун, Молодая Гвардия, 2012)。

10 楊尚昆『楊尚昆回憶錄』一一八頁。

11 『博古伝』一七四—一七五頁。

12 王明による呼称である。ソ連のトロツキー、ジノヴィエフ、カメネフの結成した「トロイカ」が念頭にある。王明『王明回憶錄』哈耶出版社、二〇〇九年、五六頁。原著はВан Мин, Польвеа КИК и предательство Мао Цзэ-дун [中共の半世紀と毛沢東の背信], Политиздат, 1975。

13 徐占權編著『解読「长征」』中央文獻出版社、二〇〇五年、九二頁。

14 中共中央文獻研究室編、金冲及、陳群主編『陳雲伝』上冊、中央文獻出版社、二〇〇五年、一六一頁。

15 舒雲『林彪伝』上冊、明鏡出版社、二〇一六年、一四二頁。

16 李維漢(羅邁)『回憶与研究』上冊、中央党史資料出版社、一九八六年、三五六頁。

17 『朱德年譜 (1886-1976)』新編本、上冊、四五〇頁。『朱德伝』は、この発言が、一五日の王稼祥発言の次になされたと思う。中共中央文獻研究室編、金冲及主編『朱德伝』修訂本、中央文獻出版社、二〇〇〇年、四二一〜四二二頁。だが張耀祠の回想録は、毛沢東の談話として、朱德の後に、王稼祥が発言したと書く。張耀祠『張耀祠回憶毛沢東』中共中央党校出版社、一九九六年、一二頁。

18 『博古伝』一七八頁。徐則浩編著『王稼祥年譜 一九〇六〜一九七四』中央文獻出版社、二〇〇一年、一三四頁。

19 葉子竜口述、溫衛東整理『葉子竜回憶録』中央文獻出版社、二〇〇〇年、三七〜三八頁。

20 彭德懷『彭德懷自述』人民出版社、一九八一年、一九三頁。『楊尚昆回憶録』一一八〜一九頁。

21 『博古伝』一八二頁。

22 この手紙は、一九六一年の総參謀部軍事訓練部編『林彪元帥軍事論文選集』に収められた「第五回『包圍討伐』の戦術について」と題する文章である。ブラウンの「短距離突撃」の考え方を、戦略と戦術の両面から、徹底的に批判する姿勢が貫かれている。李德、舒雲編著『林彪日記』上冊、明鏡出版社、二〇〇九年、七〇〜七九頁、一一〇頁。伍修権が、その回想録で、林彪がこの日取り上げたのが三四年六月に書かれた「短距離突撃を論ず」であり、それはブラウン戦略を積極的に支持する内容であったと書く(伍修権『伍修権回憶録』中国青年出版社、二〇〇九年、八八頁)のは、林彪事件(九一三)後の政治情勢に迎合した、甚だしい事実の改竄である。三四年六月に書かれた「短距離突撃を論ず」は、国軍の目を眩ますために、紅軍が旧式の戦術論に固執するかのように見せた文章であった。こうしたフェイク・ニュースを公表することには、彭德懷も異論を唱えるとはなかった。(ACAC:74)

23 『朱德年譜 (1886-1976)』新編本、上冊、二〇〇六年、四五一頁。

24 潘佐夫『毛沢東伝』上冊、三七〇頁。

25 楊奎松『中共与莫斯科的關係 (1920〜1960)』東大圖書公司、一九九七年、四〇七頁。

26 Jerome Chen, "Resolutions of the Tsunyi Conference," in *The China Quarterly*, No. 40 (Oct.-Dec. 1969), pp. 1-38.

27 郭華倫『中共史論』四版、第四冊、国立政治大学國際關係研究中心、一九八二年、第四章「再論遵義會議」四七二頁。

28 『中共史論』四版、第三冊、国立政治大学國際關係研究中心、一九八二年、第三章「遵義會議」一八〜一九頁。この郭華倫の情報をもとに、さらに大胆な仮説を展開したのが鄭学稼である。その遺作『中国共產主義運動史』第一五冊、政大出

出版社、二〇一九年、附録四〇「關於遵義會議的決議」、特に五〇九頁の議論については、第五章と第六章で詳しく検討する。

- 29 胡喬木「胡喬木關於遵義政治局擴大會議傳達提綱的成文時間的考証致陳雲的信及陳雲的批示」遵義會議紀念館編、費侃如主編『陳雲與遵義會議』中央文獻出版社、党建讀物出版社、二〇〇四年、一〇五―一〇六頁。胡喬木は、この中で、二月一六日と三月四日に、陳雲のこのメモ断片が紅軍各部隊に伝達されたと述べる。当時、中革軍委の機要科責任者であった伍雲伍の日記を、その根拠とする。それぞれ、「副主席（中央書記処書記の陳雲）の報告を聞く」、「1010の報告を聞く」という記載がある。二月一六日に陳雲メモが伝達されたのは確かである。張聞天選集伝記組編、張培森主編『張聞天天譜（1900-1976）』修訂本、上巻、中共党史出版社、二〇〇〇年の「二月八日」の条には、「教訓大綱」は簡潔に遵義會議決議の基本精神をまとめており、中央政治局常務委員（中央書記処書記のこと）の張聞天（洛甫）、毛沢東、陳雲などが、次々と中革軍委縱隊や各軍団の幹部会に決議の内容を伝えた」（二七一―二七二頁）とあり、そこに陳雲の氏名も見えるからだ。しかし、三月四日の伍雲伍日記にある「1010報告」は、陳雲報告を指すものではない。やはり『張聞天天譜（1900-1976）』修訂本、上巻の「三月四日」の条を参照すれば、伍雲伍も所属した中革軍委縱隊の「活動分子會議」での報告者は洛甫となっているからだ。なお陳雲のメモ断片が、この年の一〇月一五日、コミンテルン執行委員会書記処緊急會議で参照された点を考慮すれば、執筆の時間幅は、「二月中旬から三月上旬」ではなく、「二月中旬から一〇月一五日」とすべきである。

- 30 中共中央文獻研究室編『毛沢東文集』第三卷、人民出版社、一九九六年、四二四―四二五頁。

- 31 對外聯絡部長の王稼祥が、帝國主義、修正主義、インド・各国反動派の三つに対して融和的であり、民族解放運動を支持することが少ない姿勢を、毛沢東が一九六二年に批判して述べた言葉。文化大革命期には、党内の資本主義の道を歩む実権派（劉少奇集團）を肅清する根拠として利用された。王稼祥に対する「三和一少」という批判が事実無根であったとして、彼の名誉回復がなされたのは、死後の七九年三月九日である。『王稼祥年譜一九〇六―一九七四』五一―七頁。

- 32 『王稼祥年譜一九〇六―一九七四』の一九七三年五月二六日の条。（五一―二頁）聶榮臻も、こう回想する。「毛沢東同志は『文化大革命』のとき、遵義會議で王稼祥が決定的な一票を投じた」と語った。（聶榮臻『聶榮臻元帥回憶錄』解放軍出版社、二〇〇五年、一九六―一九七頁）聶の回想録の元になった文章は、八九年九月一九日に、王稼祥の未亡人、朱仲麗の求めに応じて書かれた「稼祥選集の出版に当たって」である。（周均倫主編『聶榮臻年譜』下巻、人民出版社、一九九九年、一二三―二頁）聶は、林彪事件直後の七一年九月二六日に開かれた林彪告発座談会（司会は李富春）で、遵義會議で何ら目立つ

た動きを見せなかった林彪に比べ、王稼祥は重要な働きをしたと述べていた。『王稼祥年譜 一九〇六―一九七四』五〇九頁。
33 王力『現場歴史：文化大革命紀事』牛津大学出版社、一九九三年、一二六頁。中共中央文献研究室編、逢先知、馮蕙主編『毛沢東年譜（一九四九―一九七六）』第五卷、中央文献出版社、二〇一三年には記載なし。

34 王玉貴『毛沢東与陳雲』湖北人民出版社、二〇〇八年、五七頁。

35 中共中央文献研究室編、金仲及主編『毛沢東伝（1883-1949）』中央文献出版社、一九九六年、三四三頁。中共中央文献研究室編、逢先知主編『毛沢東年譜（一九三三―一九四九）』修訂本、上巻、中央文献出版社、四四二―四四三頁。

36 Benjamin Yang, *From Revolution to Politics: Chinese Communists on the Long March*, Westview, 1990, pp. 180-181.

37 『楊尚昆回憶録』一三三頁。中共中央文献研究室編『劉少奇年譜』上冊、中央文献出版社、二〇〇八年、一四〇頁。

38 『張聞天年譜（1900-1976）』修訂本、上巻、一七一―一七二頁。

39 『回憶与研究』上冊、三五三頁。

40 同右、一七三頁。

41 陳虎『長征』日記』中国長安出版社、二〇〇五年、一七五頁。

42 同右、一九一頁。

43 『聶榮臻元帥回憶録』一九八頁。

44 譚智勇『四渡赤水』人民出版社、二〇〇〇年、八四頁。

45 『中共史論』四版、第三冊、一八―一九頁。

46 (ZSZSL 3: 2305) は、この党務委員会委員を「不詳」とする。党史刊行物では、国民党への投降者の氏名を「不詳」とするのが一般である。しかし、『中国共産主義運動史』第三冊、政大出版社、二〇一九年、第一章「突圍布署和瞿秋白被捕殺」を参照すれば、その「中革军委」名簿の、第三軍団「中央地方工作团主任」に「郭潜（即陳然）」の氏名を確認できる。（二五頁）鄭学稼のこの情報は、『中共史論』四版、第三冊、第二章「遵義會議」の六頁よりの引用である。

47 『長征』日記』一九七頁。

48 王焰主編『彭德懷年譜』人民出版社、一九九八年、一二〇頁。

49 郭華倫本人が、この鴨溪滞在を、遵義會議から「一週間後」と書くのは記憶の混乱である。『中共史論』四版、第三冊、

- 一八～一九頁。
- 50 『彭德懷年譜』一一七～一一八頁。
- 51 中共中央文獻研究室編『任弼時年譜（一九〇四～一九五〇）』中央文獻出版社、二〇一四年、二四九頁。
- 52 「中共中央致二、六軍団、四方面軍及中央軍区電」（一九三五年二月二八日）『遵義會議文獻』二九～三三頁。「教訓決議」との異同について Benjamin Yang, "The Zunyi Conference as one Step in Mao's Rise to Power," in *The China Quarterly*, No.106 (Jun, 1986), pp. 262-265.
- 53 『張聞天年譜（1900-1976）』修訂本、上巻、一七三頁、注①。なお、「教訓決議」をモスクワに持参したことを陳雲本人は頑なに否定した。朱桂木「聴陳雲同志說党史」『中共党史研究』二〇〇五年第四期、を参照。
- 54 『毛沢東年譜（一八九三～一九四九）』修訂本、上巻、六〇三頁。
- 55 蔣建農他編『毛沢東著作版本編年紀事』上冊、湖南人民出版社、二〇〇三年、一六七頁。
- 56 毛沢東文獻資料研究会編、竹内実監修『毛沢東集』第五冊、北望社、一九七〇年、八三頁。
- 57 『胡喬木回憶毛沢東』一七七頁。
- 58 『陳雲伝』上冊、一六七頁の注③。
- 59 『中国革命戦争的戰略問題』第五章「戰略防禦」第一節「積極防禦和消極防禦」『毛沢東選集』第二版、第一巻、人民出版社、一九八頁。『毛沢東集』第五冊、一一六～一一七頁。
- 60 晋冀豫魯中央局編『毛沢東選集』（党内文獻幹部必読）二巻本、中共晋冀豫魯中央局編印、一九四八年、目錄、二頁。
- 61 楊奎松が、「彼ら（毛沢東、洛甫、王稼祥）は博古、ブラウンが保存していたコミンテルン関係電報を閲覽し、モスクワの指示のかんりのものが、毛沢東の考え方と期せずして一致していることを見つけて喜んだ」と書くのは、因果関係を逆転させた見方である。毛沢東は、モスクワの指示との一致を見つけたのではなく、モスクワの指示と一致するように、自分の見解を修正したのである。『中共与莫斯科的關係（1920～1960）』四一四頁。
- 62 楊奎松『西安事变新探：張学良与中共關係之研究』東大図書公司、一九九六年、一〇二頁。
- 63 この三つの原文の「総括決議」における引用箇所は、それぞれ、(JDYL 12: 52-53:54) (JDYL 12: 60) (JDYL 12: 54)
- 64 「コミンテルン執行委員会政治書記処政治委員会のエーヴェルト、シュテルン、中共中央宛て電報」（一九三四年二月一一

- 日、モスクワ) (PFIACH: 495/184/47/21-22) (SWAYD: 1479)
- 65 「コミンテルン執行委員会政治書記処政治委員会のエーヴェルト、中共中央宛て電報」(一九三四年六月一六日、モスクワ) (PFIACH: 495/184/47/150-154) (SWAYD: 14,143-145)
- 66 「王明と康生の中共中央宛て電報」(一九三四年一〇月一四日) (PFIACH: 495/184/48/30) (SWAYD: 14,278)
- 67 「中共中央のコミンテルン執行委員会宛て電報」(一九三三年十二月二十日) (PFIACH: 495/184/54/47.9) (SWAYD 13: 652-653)
- 68 「コミンテルン執行委員会政治書記処政治委員会のエーヴェルト宛て電報」(一九三三年一月二三日) (PFIACH: 495/184/36/233-235) (SWAYD 13: 626)
- 69 『中国共産主義運動史』第十五冊、附録四〇「關於遵義會議的決議」、五〇九頁。「革命に有益な行動であったと言わざるを得ない」というフレーズは、毛沢東「論反对日本帝国主義的策略」(一九三五年二月二七日)『毛沢東選集』第二版、第一卷、一四六頁に見える。最も早い時期の単行本(正報社、一九四七年)テキストにも、初版からの大きな修正の跡はない。
- 『毛沢東集』第五冊、一一六―一一七頁。
- 70 『遵義會議文獻』三二頁。
- 71 『毛沢東年譜』(一九九三―一九九九)修訂本、上巻、四八八頁。
- 72 瓦窯堡會議の決議「中共中央關於目前政治形勢与党的任務的決議」一九三五年二月二五日通過)の「(三) 国防政府与抗日聯軍」(DYTL 12: 538-540)を参照。
- 73 このメモは、大陸の党史研究では、一九八四年二月の胡喬木と陳雲の鑑定以来、陳雲「遵義政治局擴大會議傳達提綱」(一九三五年二月或三月)と表記されるのが通例だが、題目・発表日時ともに、正確ではない。注29も参照。
- 74 『党的文獻』二〇〇一年第四期は、この報告を「コミンテルン執行委員会書記処會議における紅軍の長征と遵義會議に関する情況報告」と命名するが、かかる表記も厳密に言えば、史実を反映していない。同報告は、遵義會議だけをテーマにしたのではなく、後で見る通り、黎平會議や會理會議との関連の中で同會議を論じたものだからである。
- 75 陳雲のここでの博古に対する批判は手厳しい。しかし、それは、上海のコミンテルン代表エーヴェルトの『中国論壇(China Forum)』リーク問題を無視した議論で、博古に対して公正を欠く。遵義會議で毛沢東への支持を留保した陳雲は、この時期

から、博古と距離を置き始めたと思われる。

76 「中共上海中央局の王明と康生宛て電報」(PLACIH: 514/1/1030/12-37) (SWAYD 14: 327)。紅軍が瑞金を出発して西部への大移動を始めるのは一〇月一日だから、中央と中革軍委は、モスクワと上海を繋ぐ無線電信機の破壊を、大移動の出発時点で知っていた。だから、『張聞天年譜(1900-1976)』修訂本、上巻、一七四頁を始めとして、各種史料が、一九三五年三月五日の任弼時の通知を受け取るまで、無線電信機が破壊された事実を中央が知らなかったと述べるのは、潘漢年と陳雲に上海行きを命じたのが二月六日だったこと(後述)を隠蔽するための工作である。任弼時がこのとき伝えた上海の無線電信機の破壊は、三五年三月に起こった上海警察による二度目の摘発であって、三四年一〇月七日の出来事を指すのではない。『任弼時年譜(一九〇四—一九五〇)』二五一頁。中共中央文獻研究室編、章学新主編『任弼時伝』上冊、中央文獻出版社、二〇一四年、三八八頁。

77 『陳雲年譜』修訂版、上冊、一九七頁。

78 同右、二〇三—二〇四頁。

79 楊尚昆がこの件に関して、洛甫自身も上海行きを希望し、皆の説得でようやく取り止めたこと記すのは注目される。(『楊尚昆回憶録』一三五頁) 羅邁も上海に行こうとしたと述べるのは、王明である。「四川省に入った後で、洛甫は毛沢東の軍事策略が間違っていると考え、陳雲や羅邁と共に紅軍を離れ、上海に戻って地下工作を行おうと決めた。毛沢東は懸命に洛甫の説得して、ここに留まってくれ、『政治舞台』で自分を引き続き支持するよう求め、『政治舞台』がぐらつけば、『軍事舞台』でも足場を失ってしまうと言った。」(『王明回憶録』一五〇頁) 王明の証言は虚偽ではない。『陳雲年譜』修訂版、上冊、一九七頁の「二月下旬」の条には、このとき、陳雲が羅邁(李維漢)から紅軍総政治部地方工作部部長の職位を譲り受けたと書く。陳雲がこの職位にあった時期は短く、上海に向かった後は、同職は再び羅邁の担当となった。『張聞天年譜(1900-1976)』修訂本、上巻、一七四頁の「三月五日」の条、そして『任弼時伝』上冊、三八八頁に、潘漢年の職位の一つを「紅軍総政治部地方工作部部長」と書くのは、したがって訂正されるべきである。羅邁が上海行きミッションを託されたのは、この地方工作部部長という職位と関係があった。なお、楊尚昆と王明が話題にした、洛甫や羅邁の上海行き志願は、三月一〇日に鴨溪で開かれた中央政治局擴大會議での出来事と考えて良い。『陳雲年譜』の「二月末あるいは三月初め」の条に、「中共中央は陳雲、潘漢年などを上海に派遣し(傍点、引用者)」と含みをもたせているのは、洛甫や羅邁のことが念頭にある

からだろう。打鼓新場（今の貴州金沙県）の周渾元部隊を攻撃すべきか否かを議論したこの会議で、ただ一人反対を唱えた毛沢東は、前敵総司令部政治委員の資格を剥奪された。毛沢東が洛甫の上海行きを必死で阻止したのは、自らの軍事指導権の回復に洛甫の援助が必要であったからだ。ただ羅邁の回憶録には、これに関する記述が一切なく、五月三二日に瀘定城で会議が開かれたとき、陳雲と潘漢年の上海行きミッションについて、別室で洛甫から告げられたことを記すのみである。『回憶与研究』上冊、三五九頁。

80 この日付は『張聞天年譜（1904-1976）』修訂本、上巻、一七五頁を参照すれば、「三月五日」と特定できる。

81 瀘定橋の戦役は、「長征」神話の重要な一幕だが、張戎が書くように、蒋介石側の記録を参照すれば、国軍が瀘定橋を攻撃したことはなく、紅軍はこの橋で一人の死者も出してゐない。Jung Chang and Jon Halliday, *Mao: The Unknown Story*, Anchor Books, 2006, 315/17130.

82 『朱德年譜（1886-1976）』新編本、上冊、五〇二～五〇三頁。

83 『陳雲年譜』修訂版、上冊、二〇七頁。

84 『陳雲伝』上冊、一七七頁。

85 同右、二〇六頁。

86 『任弼時伝』上冊、三八八頁。

87 (BYN: 150)。尹驥も、潘漢年と陳雲にミッションが伝えられたのが「遵義会議より約一か月後」と書く。ただし、それを伝達したのは洛甫であったと言う。尹驥『潘漢年伝』中国人民大学出版社、一九九六年、一四二頁。

88 武在平『潘漢年全伝』天津人民出版社、二〇一五年、九一頁。

89 『中共与莫斯科的關係（1920～1960）』四〇〇～四〇一頁。

90 「潘漢年のコミンテルン執行委員会書記処緊急会議における発言」（一九三五年一〇月一日、モスクワ）(PLACIH: 495/18/1012/67-78) (SWAYD 15: 55) は言う。「我々が反帝国主義人民戦線の方針をもっと前に採用して、王明同志が最近提出した建議に従っていけば、我々がそうしていれば、蒋介石軍隊の進攻を防げただろう。」また、一九三五年一二月三日のスターリン・陳雲談話については、余汝信編『康生年譜：一個中国共产党人の一生（1898-1975）』新世紀出版及伝媒有限公司、二〇一三年、八〇頁、『陳雲年譜』修訂版、上冊、二一六～二一七頁を参照。

91 『陳雲年譜』修訂版、上冊、一二三頁。

92 中共側が「第五回」と呼ぶ「包圍討伐」反対戦争は、一九三三年九月から三四年一〇月までを指すが、モスクワは、福建事変の失敗を指標に前後二つに分け、三三年一月までを「第五回」、それ以後を「第六回」とした。

93 「コミンテルン執行委員会書記処緊急会議第8（A）号記録」（一九三五年一〇月一日、モスクワ）（PLACIH: 495/18/1022.1）（SWAYD 15: 57）

94 コミンテルンの指示によって削除された陳雲「史平報告」のテキストには、これ以外に、王明が『王明回憶録』で紹介した次の二つのバリエーションがある。「毛沢東は以前から周恩来が総政治委員にあるのを更迭したいと考えていた。そこで、洛甫を博古の代わりに総書記に就けることを条件に、洛甫と同盟を結んだ。」「遵義会議で、毛沢東は博古と周恩来を批判した際、彼らが行軍の途中で戦闘を交えるのを望まなかったために、行軍が『引越騒動』に近いものになったと述べた。けれども、遵義会議の後で指揮権を握ってしまうと、部隊を容赦なく戦闘と移動とに投入したため、多くの不満を引き起こした。」王明は、この二つのバリエーションに、『共産国際』（中文版）一九三六年第一二期合刊、四九頁、五〇頁という注記を施し、施平（陳雲）「英勇的西征」からの引用であることを強調した。だが、『共産国際』掲載の施平（陳雲）「英勇的西征」の該当頁を検索しても、以上の文章は見出せない。それでは、王明が見た施平（陳雲）の原文は、『共産国際』掲載前の原稿だったのだろうか。『共産国際』掲載前に、コミンテルン側の検閲が入り、原稿にあった二つの文章が削除されたのだろうか。けれども、この仮説は成立しない。なぜなら、「トリアッティ・メモ」に明らかなように、トリアッティは、メモに記した以外の新たな削除や訂正を指示したことはないからである。王明の二つのバリエーションは彼の偽造になるものだ。そのことを最も雄弁に示すのは、周恩来の職位を「総政治委員」と書いていることである。この誤記は、郭華倫が『中共史論』四版、第三冊で、陳然の所有する遵義会議決議メモを紹介する際、私が「七項決定」と呼んだ文献の第二条に、周恩來の職位を「総政治部主任」と記したことから来ている。すでに述べたように、それは史実を全く反映していない。郭華倫の論文は一九六九年に公表され、アメリカの近代史学界で大きな話題を呼んでいた。王明が『王明回憶録』を書いたのは一九七四年である。生涯の最後に、中共の総括的批判を行う際、彼の手元には信頼すべき史料がほとんど残されていなかった。王明は、この数少ない史料の中から、よりによって郭華倫の誤った情報を選び出して、施平（陳雲）の文章を偽造し、毛沢東を不当に貶めようとしたのである。

- 95 『伍修權回想録』八二～八三頁。
- 96 陳石平『中國元帥劉伯承』中共中央文校出版社、一四五頁。
- 97 聶榮臻等著『偉大的転折…遵義會議五十周年回憶録專輯』貴州人民出版社、一九八四年、五五八頁。
- 98 楊成武『偉大転折』『偉大的転折…遵義會議五十周年回憶録專輯』二八一頁。
- 99 同右、二八一～二八二頁。
- 100 王首道『王首道回憶録』解放軍出版社、一九八八年、一六三～一六四頁。
- 101 張穎『周恩來与鄧穎超』東方出版社、二〇〇五年、八一頁。
- 102 『張耀祠回憶毛沢東』一九頁。
- 103 王首道『懷念周恩來同志』王首道『懷念集』湖南人民出版社、一九八三年、六〇頁。
- 104 『朱德年譜（1886-1976）』新編本、上冊、四九三～四九四頁。
- 105 『林彪伝』上冊、一四四、一五一頁。
- 106 『楊尚昆回憶録』一三四頁。
- 107 王平『劉少奇在長征途上』中央文獻研究室第二編研部編『話說劉少奇…知情者訪談録』中央文獻出版社、二〇〇〇年、一六二頁。
- 108 彭德懷が、このとき劉少奇が話した改善策四項の概要を、その供述書に記す。『彭德懷自述』一九七頁。
- 109 『楊尚昆回憶録』一三三頁。『劉少奇年譜』上冊、一四〇頁の記述は、真相を把握するには簡潔過ぎる。格段に情報量が増えた中共中央党史文獻研究院編『劉少奇年譜』増訂本、第一卷、中央文獻出版社、二〇一八年にも、この出来事に関して、何ら新しい史料が追加されていない。
- 110 『楊尚昆回憶録』一三四頁。黄克誠は回想録に、自分は彭德懷の身代わりとして會議の後で集中砲火を浴びたと記すが、劉少奇に同調して中央に報告を書いた時期をほかしている。黄克誠『黄克誠回憶録』上冊、解放軍出版社、一九八九年、二二九頁。
- 111 『聶榮臻元帥回憶録』二〇六～二〇七頁。
- 112 『朱德伝』四三〇頁。

- 113 『彭德懷自述』一九九頁。
- 114 『楊尚昆回憶錄』一三三頁。
- 115 『張聞天年譜(1904-1976)』修訂本、上巻、一七五頁。
- 116 『楊尚昆回憶錄』一三四頁。
- 117 『張聞天年譜(1904-1976)』修訂本、上巻、一七六頁。
- 118 李銳『廬山會議實錄』最新増訂版、天地圖書、二〇〇九年、二二八頁。
- 119 中共中央文獻研究室編『周恩來年譜(一八九八—一九四九)』人民出版社、一九八九年、四四八頁。
- 120 同右、四四八—四四九頁。
- 121 「デIMITロフの中共中央宛て電報」(一九三九年一〇月八日、モスクワ) (PIACIII: 495/184/3/48) (KRZS 18: 289)
- 122 「モルドヴェノフの中國問題小組工作結果に關するデIMITロフ宛て書面報告」(一九三九年八月一九日、モスクワ) (PIACIII: 495/74/295/740) (KRZS 18: 275)
- 123 Georgi Dimitrov, "14 February 1939," "20 May 1939," in Ivo Banac (Introduced and edited), *The Diary of Georgi Dimitrov 1933-1939*, Yale University Press, 2003, pp.95-96, p.108.
- 124 『林彪伝』上冊、二八六頁。
- 125 「毛沢民のコミンテルン執行委員會宛て書面報告」(一九三九年八月二六日、モスクワ) (PIACIII: 495/74/296/115-131) (KRZS 18: 335)
- 126 「ブラウンのコミンテルン執行委員會宛て書面報告」(一九三九年九月二二日、モスクワ) (PIACIII: 495/74/298/80-90) (KRZS 18: 347-348)
- 127 「中央關於反對敵人五次『開剿』的總結決議」(遵義決議):一九三五年一月八日政治局會議通過」中共中央書記處編『六大以來』(黨内秘密文件)上冊、人民出版社、一九八一年、内部發行、六七頁。(DYI 18: 53)のテキストは、この「×××」を「××」と表記する。これでは「×××(周恩來)」が、「××(華夫、もしくは博古)」になつてしまふ。周恩來に対する批判を隱蔽する措置として、これは極めて重大な改竄行為であると言わざるを得ない。

128 『林彪伝』上冊、二八八頁。

129 同右、二八七頁。

130 潘佐夫『毛沢東伝』上冊、三八四頁、四四八頁（第五編、注202）。

131 『林彪伝』上冊、二八七頁。

132 『紅太陽怎樣升起：延安整風的來竜去脈』一四一頁。

133 「ロサンテルン執行委員会政治書記処政治委員会の中共中央宛て電報」（一九三三年一〇月七日、モスクワ）（PLACIH: 495/184/36/192）（SWAYD 13: 542）は「言つ」。「我々は名簿から候補委員の盧福坦と羅登賢を削除した。朱徳と顧作霖を彼らの代わりに政治局に入れるのが良い。誤解なきよう、もう一度、政治局構成員を復唱する。モスコフ（周恩來）、項英、プリンスキー（任弼時）、バガレロフ（秦邦憲（博古））、趙容（康生）、廖陳雲（陳雲）、張国燾、毛沢東、王明、イスメロフ（張聞天（洛甫））、鄧発、朱徳、顧作霖。中央書記処は三人で構成しても良いが、各地を視察することを考慮し、我々には以下の五人で組織するよう建議したい。モスコフ、項英、王明、張国燾、バガレロフである。」

134 高新民、張樹軍『延安整風実録』浙江人民出版社、二〇〇〇年、六一頁。

135 他の一三人の没年を年代順に列挙すれば次の通り。博古（一九四六年四月八日）、鄧発（四六年四月八日）、凱豊（五五年三月二三日）、劉少奇（六九年一月二日）、林彪（七一年九月一三日）、王稼祥（七四年一月二五日）、オットー・ブラウン（七四年八月一五日）、彭徳懷（七四年一月二九日）、李富春（七五年一月九日）、周恩來（七六年一月八日）、洛甫（七六年七月一日）、朱徳（七六年七月六日）、毛沢東（七六年九月九日）。毛沢東とオットー・ブラウンのほかは、全て不審死の疑いを免れない。

136 この二〇二一年の歴史決議に対する私の基本的な考え方は、以下の文章に記してある。緒形康「思想」一般社団法人中国研究所編『中国年鑑 2021』明石書店、二〇二二年、所収。